

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要18

2008. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要18

2008. 3

徳島市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成16～18年度に実施した4遺跡6件の発掘調査概要報告書である。
- 2 報告書作成の費用は、徳島市教育委員会の負担による。
- 3 発掘調査は、徳島市教育委員会社会教育課勝浦康守が行った。
- 4 本書の編集・執筆は勝浦が行った。また、木簡の釈文については、徳島市立徳島城博物館根津寿夫氏より御教示を賜った。御礼申しあげる。
- 5 木簡の保存処理は、株式会社京都科学に委託した。
- 6 遺構写真・遺物写真の撮影は、勝浦が行った。
- 7 発掘調査で得られた遺物、その他の資料は、すべて徳島市教育委員会が保管している。
- 9 本書の作成に係る作業には、調査補助員および作業員諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。
阿部喜美代 宮浦京子 折野絵美 露口啓子 佐伯俊裕 中野勝美 市川欣也 青木健司



調査地位置図(国土地理院発行1/50,000「徳島」[川島]縮尺使用)
I 徳島物構跡 II 矢野遺跡 III 名東遺跡 IV 観音寺遺跡

本文目次

I 徳島惣構跡	
1 遺跡の立地と歴史的環境	1
2 調査に至る経緯と経過	1
3 基本層序	5
4 調査の概要	5
(1) 掘立柱建物跡 SE01	6
(2) 土壇 SK01~12	6
(3) 石室 SN01~03	21
(4) 井戸 SE01	21
(5) 井戸 SE02・03	23
(6) Pit01	24
(7) 溝 SD01	25
5 調査成果のまとめ	25
II 矢野遺跡	
1 遺跡の立地と歴史的環境	27
2 調査に至る経緯と経過	27
3 平成16年度の調査成果	
(1) 基本層序	29
(2) 遺構と遺物	29
4 平成18年度の調査成果	
(1) 基本層序	32
(2) 調査の概要	32
5 遺構と遺物	35
6 調査成果のまとめ	39
III 名東遺跡	
1 遺跡の立地と歴史的環境	41
2 調査に至る経緯と経過	41
3 基本層序	43
4 1区の調査成果	
(1) 方形周溝墓 SL28~30 (名東28~30号墓)	43
5 2区の調査成果	
(1) 方形周溝墓 SL31~33 (名東31~33号墓)	45
6 調査成果のまとめ	46
IV 観音寺遺跡	
1 遺跡の立地と歴史的環境	47
2 調査に至る経緯と経過	47
3 平成17年度の調査成果	49
(1) 遺構と遺物	49
4 平成18年度の調査成果	51
(1) 遺構と遺物	51
5 調査成果のまとめ	52

図版目次

I 徳島惣構跡

- 図版1 上: 検出遺構(後方に徳島城跡)
下: 検出遺構
- 図版2 上: 検出遺構(第6層任意面)
下: 検出遺構(第7層上面)
- 図版3 上: 掘立柱建物跡 SB01
中: 南壁面
下: 土壌 SK07南壁面
- 図版4 上: 土壌 SK05遺物検出状況
中: 土壌 SK05遺物検出状況
下: 土壌 SK05遺物検出状況
- 図版5 上: 石室 SN01
中: 石室 SN02
下: 石室 SN03
- 図版6 上: 井戸 SE01
中: 井戸 SE02・03
下: 井戸 SE02・03
- 図版7 上: Pit01遺物検出状況
中: Pit01遺物検出状況
下: 溝 SD01東壁断面
- 図版8 土壌 SK01出土遺物
- 図版9 土壌 SK01出土遺物
- 図版10 土壌 SK02出土遺物
- 図版11 土壌 SK03出土遺物
- 図版12 土壌 SK03出土遺物
- 図版13 土壌 SK04出土遺物
- 図版14 土壌 SK04出土遺物
- 図版15 土壌 SK05出土遺物
- 図版16 土壌 SK06出土遺物
- 図版17 土壌 SK06出土遺物
- 図版18 土壌 SK07出土遺物
- 図版19 土壌 SK07出土遺物
- 図版20 土壌 SK07出土遺物
- 図版21 土壌 SK08 (249~254)、SK09 (255~262)、SK10 (263~269・272) 出土遺物
- 図版22 土壌 SK10 (270・271・273~282)、SK11 (283~287) 出土遺物
- 図版23 土壌 SK11 (288~292)、SK12 (293~295・297~318)、石室 SN03 (296) 出土遺物
- 図版24 井戸 SE01出土遺物
- 図版25 井戸 SE01出土遺物
- 図版26 井戸 SE01出土遺物

- 図版27 井戸 SE01出土遺物
- 図版28 井戸 SE02 (353~360)、溝 SD01 (365~374) 出土遺物

- 図版29 Pit01出土遺物

II 矢野遺跡

- 図版30 上: 16-1区検出遺構
下: 16-3区検出遺構
- 図版31 上: 16-2区検出遺構
下: 16-2区方形周溝墓 SL01・02
- 図版32 上: 18-1区検出遺構
中: 18-2区検出遺構
下: 18-3区検出遺構
- 図版33 上: 18-3区土壌 SK01遺物検出状況
中: 18-4区検出遺構
下: 18-4区土壌 SK02遺物検出状況
- 図版34 上: 18-4区土壌 SK02遺物検出状況
中: 18-5区検出遺構
下: 18-6区検出遺構
- 図版35 上: 18-7区検出遺構
中: 18-7区自然凹地 SX02
下: 18-7区自然凹地 SX02遺物検出状況
- 図版36 上: 18-8区検出遺構
中: 18-8区方形周溝墓 SL01・02
下: 18-9区検出遺構
- 図版37 上: 18-9区方形周溝墓 SL01・03
中: 18-9区方形周溝墓 SL01・03
下: 18-10区検出遺構
- 図版38 16-1区堅穴住居跡 SA01 (1・2)、SA02 (3~7) 出土遺物
- 図版39 16-1区堅穴住居跡 SA02 (8~13)、16-2区方形周溝墓 SL02 (14・15) 出土遺物
- 図版40 18-3区土壌 SK01 (16・17)、溝 SD01 (18~21) 出土遺物
- 図版41 18-4区土壌 SK02出土遺物
- 図版42 18-4区土壌 SK02出土遺物
- 図版43 18-5区自然凹地 SX01出土遺物
- 図版44 18-7区自然凹地 SX02 (37)、18-9区方形周溝墓 SL03 (38・39)、18-10区方形周溝墓 SL05 (40) 出土遺物

II 名東遺跡

- 図版45 上：1区検出遺構
下：1区検出遺構
図版46 上：2区検出遺構
下：2区検出遺構
図版47 方形周溝墓 SL30出土遺物

IV 観音寺遺跡

- 図版48 上：掘立柱建物跡 SB0501柱穴列
下：溝 SD0601
図版49 出土遺物
図版50 出土遺物
図版51 出土遺物

挿 図 目 次

I 徳烏惣構跡

- 図1 調査地の位置と周辺
図2 調査地の配置と絵図
図3 遺構配置図、南壁断面土層図
図4 土壌 SK01出土遺物
図5 土壌 SK02出土遺物
図6 土壌 SK03出土遺物
図7 土壌 SK04出土遺物
図8 土壌 SK05出土遺物
図9 土壌 SK06出土遺物
図10 土壌 SK07出土遺物
図11 土壌 SK07出土遺物
図12 土壌 SK08 (249~254)、SK09 (255~262)、SK10 (263~282)、SK11 (283~292) 出土遺物
図13 土壌 SK12 (293~295・297~318)、石室 SN03 (296) 出土遺物
図14 井戸 SE01出土遺物
図15 井戸 SE01出土遺物
図16 井戸 SE02出土遺物
図17 Pit01 (361~364)、溝 SD01 (365~374) 出土遺物

II 矢野遺跡

- 図1 調査地位置図
図2 調査地概略図、遺構配置略図
図3 16-1~3区東壁断面図
図4 16-1~3区遺構配置図

- 図5 16-1区竪穴住居跡 SA01・02、16-3区方形周溝墓 SL02出土遺物
図6 18-1~10区南壁断面土層図
図7 18-1~10区遺構配置図
図8 18-3区土壌 SK01 (16・17)、溝 SD01 (18~21) 出土遺物
図9 18-4区土壌 SK02出土遺物
図10 18-5区自然凹地 SX01出土遺物
図11 18-7区自然凹地 SX02 (37)、18-9区方形周溝墓 SL03 (38・39)、18-10区方形周溝墓 SL05 (40) 出土遺物

III 名東遺跡

- 図1 調査地位置図
図2 調査地概略図
図3 1区遺構配置図、北・東壁断面土層図
図4 方形周溝墓 SL30出土遺物
図5 2区遺構配置図、南・西壁断面土層図

IV 観音寺遺跡

- 図1 調査地位置図
図2 調査地概略図
図3 遺構配置図
図4 出土遺物
図5 遺構配置図
図6 出土遺物
図7 観音寺遺跡における掘立柱建物跡

表 目 次

- 表1 Pit01出土中国銭一覧

報告書抄録

ふりがな		とくしましまいごうぶんかさいほくつちようさがいよう						
書名		徳島市埋蔵文化財発掘調査概要						
副書名								
巻次		18						
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名		勝浦康守						
編集機関		徳島市教育委員会						
所在地		〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 Tel. 088-621-5418						
発行年月日		西暦 2008年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調 査 期 間	調査面積 ㎡	調 査 原 因
		市町村	群 誌					
徳島惣構跡	徳島県徳島市 徳島町	36201	-	34度 4分 23秒	134度 33分 23秒	20040208～ 20040421	385	マンション建設 工事に伴う 事前調査
矢野遺跡	徳島県徳島市 国府町	36201	-	34度 3分 52秒	134度 28分 12秒	20050104～ 20050127 20060907～ 20061110	186 665	水道管理用道 路建設工事に 伴う事前調査
名東遺跡	徳島県徳島市 名東町	36201	-	34度 3分 58秒	134度 30分 18秒	20060612～ 20060707	205	共同住宅建設 工事に伴う事 前調査
観音寺遺跡	徳島県徳島市 国府町	36201	-	34度 4分 6秒	134度 28分 19秒	20050119～ 20050320 20060122～ 20060321	150 100	国補事業 阿波国府跡 所在確認調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
徳島惣構跡	城下町跡	中 世 近 世		土塼・井戸・溝 掘立柱建物跡		陶磁器・瓦 木製品 金属器		
矢野遺跡	集落跡	弥 生 代		周溝墓・土塼 溝		弥生土器 土師器 須恵器・瓦		
名東遺跡	集落跡	弥 生		周溝墓		弥生土器		
観音寺遺跡	集落跡 官衙跡	古 代		掘立柱建物跡 溝・竪穴住居跡		土師器・須恵器 黒色土器 緑釉土器 瓦器・瓦		

I 徳島惣構跡

1. 遺跡の立地と歴史的環境（図1）

1585年（天正13）、阿波国の領主となった蜂須賀家政は居城を徳島城に定めるとともに城下町の建設を始める。徳島城下町の特徴は、徳島城が築かれた標高61mを測る城山が位置する「徳島」を中心とした吉野川下流域のアルタ地帯の鳥状微高地を利用した鳥普請である。

徳島惣構跡は徳島城が築かれた「徳島」を指し、北は助任川、南は寺島川、東は福島川に囲まれ、西は西之丸に石垣を築き御花島と界する。東は石垣と堀で城内と武家地を分ける。今回の調査地は、徳島城の東側の堀に隣接する地域で、徳島城下町の武家地として整備されている。

なお、徳島城築城以前には、1385年（元中2・至徳2）の細川頼之の潤津城（潤山城）が城山山上にあったとされ、1582年（天正10）、長宗我部元親の侵攻の経緯がある。ただ、蜂須賀入国以前の中世における城山周辺での考古学的な立場からの言及については、これまでなされていない。

城山山下にあたる徳島惣構跡の1999年（平成11）の調査は、蜂須賀入国以前の中世の遺構や遺物が初めて確認された事例である。吉野川下流域の低湿地帯でありながら、徳島城内～徳島惣構跡の一部に広がる城山南東部の小範囲の地域には自然河川による良好なシルト層の堆積がみられ、この地域での異例な好環境は中世の段階から活用されており、徳島城や城下町の建設においても充分な礎であったことが考えられる。

徳島惣構跡は、寺島・福島など周辺の城下町と同様に武家地として整備されるが、特にこの地域には、稲田雅楽（1500石）・坂部主税（700石）・中村主馬助（2000石）・蜂須賀山城（1300石）・池田登（5000石）・蜂須賀準人（1300石）・蜂須賀朝負（700石）ら徳島藩家老・中老職に就いた藩士の屋敷が数多く置かれ、徳島城を中心に展開する城下町の中で最も要衝の地とされる。

1692年（元禄5）の「御山下屋敷略図」では、調査地は稲田勘解由の屋敷地であることがわかる。また、安政年間（1854～1860）の「御山下島分絵図・徳島」でも稲田勘解由の名前がみられることから、江戸時代を通じて稲田屋敷の一面に該当する。稲田勘解由に至政（初代）は稲田貞祐の次男吉勝の子であり、徳島藩家老稲田種元は叔父にあたる。稲田家（2011石6斗）は初代至政から11代長鎮に至るまで代々、中老・番頭・土組頭・年寄役の要職に就き、屋敷は藩道である淡路街道に面している。

2 調査に至る経緯と経過（図2）

今回の調査は、マンション建設工事に伴うものであり、工事対象地での遺跡の残存状況を把握するために試掘調査を実施した。試掘調査では上位に攪乱層が全面にみられたが、近世城下町跡の整地層・遺構面は良好に残っており、さらに、下位には近世以前と考えられる堆積層が確認された。

調査は上位攪乱層を重機で掘削除去した後、人力掘削に伴う排土の置き場の都合上、調査地を便宜的に二つに分け調査を進めた。稲田屋敷内での廃棄土壌や井戸・石室などの遺構や遺物を確認するとともに、試掘段階から明らかであった中世の遺構や遺物を確認している。



図1 調査地の位置と周辺 (安政年間)



図2 調査地の配置と絵図 (安政年間 S=1:5,000)

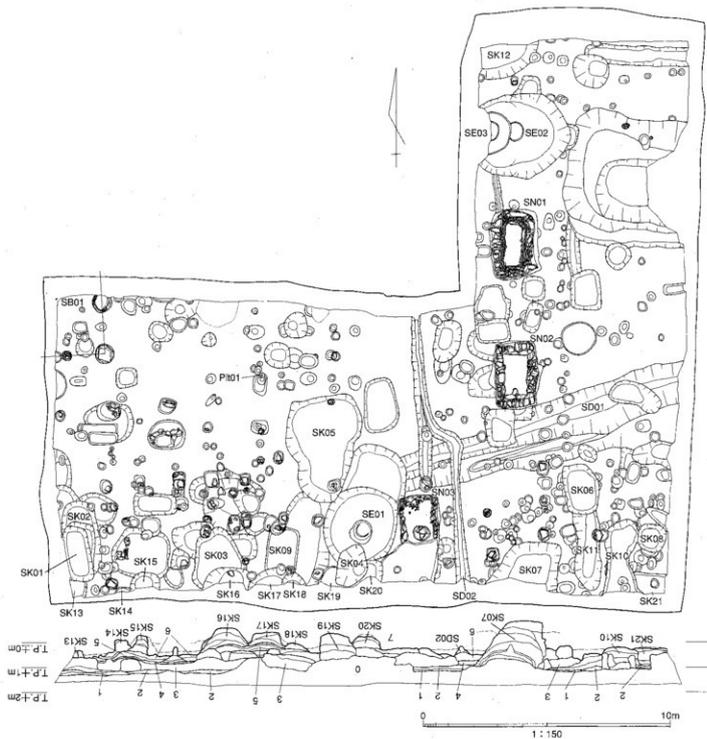


图3 遺構配置圖・南壁断面土層図

3 基本層序 (図3)

調査地周辺の標高は T.P.+1.7m を測る。現代盛土層および攪乱土層下に第1～7層が堆積する。以下、上位より概略する。

第0層：現代盛土および攪乱土層

第1層：層厚10cmを測る灰白色シルトの整地層である。砂粒を含まない良質の土であり、整地土上面に貼り付けられ生活面を形成すると考えられる。

第2層：層厚15cmを測る灰オリーブ～灰黄色シルトで、下位面に赤土（橙色粘土質シルト）が敷かれる整地土である。

第3層：層厚40cmを測る灰黄色砂質シルトで、黄灰色細砂が混在し下位面に赤土が敷かれる整地土である。

第4層：層厚10cmを測る灰白色シルトの整地層である。第1層と同じく、整地土上面に貼り付けられ生活面を形成すると考えられる。

第5層：層厚10～15cmを測る灰色砂の整地土である。廃棄土壌などの遺構が集中する箇所で使用されていることから地盤の沈下や地盤の強度を図るための整地土として使用された可能性がある。

第6層：層厚10～20cmを測る灰黄色～灰白色シルトに灰白色細砂が混在し、赤土が挟在する整地土である。

第7層：灰白色～浅黄色シルトの遺構検出ベース層であり、下位では青灰色粘土質シルト～砂層へ変化する。

第1～6層は屋敷内で整地が行われる際に使用された土砂であるが、特に掘削深度の深い遺構上などで地盤が脆弱な場合には砂を敷きつめたり、また、整地の仕上げに上面に良質なシルトを叩き締めるなど、場に応じて異なる種類の土砂が使い分けられたと考えられる。

第7層のシルト層の堆積は、徳島城下町跡においては城山南東の比較的限定された小地域でみられる。この地域における良好な河成堆積を示すものであり、蜂須賀入国以前に存在が想定される中世遺跡の立地に対し好条件を備えていたものと考えられる。

4 調査の概要 (図3、図版1～3)

調査では、基本層序で示した第1～6層の各上面において近世の生活面が求められるが、各整地層は屋敷の広範囲に連続的にみられるのではなく、部分的かつ重層的な堆積を示すことから遺構面の抽出が非常に困難である。このため、調査地全域で第7層上面を最終遺構検出面（下層）として遺構・遺物の検出を行っているが、一部調査地の東1/2では第6層の任意面（上層）においても遺構・遺物の検出を行った。

徳島藩士稲田勘解由の屋敷に伴う掘立柱建物跡・柱穴・土塙・井戸・石室・溝などの近世の遺構と遺物、さらには蜂須賀入国以前と考えられる中世の遺構と遺物を検出している。以下、主な遺構と遺物について概略する。

(1) 掘立柱建物跡 SB01 (図3、図版3)

調査地の北西で掘立柱建物跡と考えられる南北方位の柱穴列1間分を確認している。柱穴は径80cmの円形もしくは一辺80cmの方形を呈し、柱穴底部に小礫を敷きつめた後、板状に加工した結晶片岩を礎板石に据える。

(2) 土壌 SK01~12 (図3)

屋敷内では頻繁な整地が繰り返し行われると同時に、物資の廃棄を伴う土壌の掘削がほぼ同一箇所で行われる。特に、この状況は通常、屋敷裏あるいは屋敷界周辺において顕著である。SK01~11は調査地の南壁面付近で集中する土壌であり、いずれも平面形態が不整形である。調査地は城下町絵図から淡路街道に面する屋敷表の一部に該当すると解釈されるが、屋敷表の土地利用としては不自然な遺構配置である。

土壌 SK01 (図3・4、図版8・9)

平面形が長径2.2m、短径1.2mの長円形を呈し、深さ60cmを測る。出土遺物には、肥前系磁器碗1~4・7・8・18、香炉11、坏16・17、小坏19・20、猪口21、蓋22、皿23~27、仏飯器30、鉢31、肥前系陶器碗5・6・9・10、皿28・29、京信楽系碗33・34・36、香炉35、ミニチュア陶器壺12、碗15、ミニチュア磁器碗13、坏14、産地不明陶器碗32、茶釜37・備前火入れ38、土師質焙烙39、土人形40~42がある。18世紀前~中葉である。

1~4は染付で、1・2は壘付無軸、3は口縁部内面に四方樺文、見込みは二重圏線と手描き五弁花文、4は口縁部外面に四方樺文、高台内に一重圏線と二重方形枠内渦福である。5・6・10は陶胎染付で壘付無軸、6は離れ砂の痕跡がある。7は青磁染付で、口縁部内面に四方樺文、8は青白磁である。9は内外面に白泥をかける。11は染付で、蛇の目軸剥ぎ高台である。

12は淡黄色胎土に黄土色釉をかける。13は色絵、14は白磁である。16~21は染付で、壘付無軸である。22は染付で口縁部内面に四方樺文、見込みは二重圏線内に手描き五弁花文である。

23は染付で、見込みは蛇の目軸剥ぎである。25は染付で、輪花型打ち成形である。26は染付で、高台見込みに二重方形枠内渦福である。27は青磁染付である。

28は体部が屈曲し口縁部が方形を呈する変形皿で、内外面に鉄軸、壘付および高台内無軸である。29は口縁部が屈曲し、内面に鉄軸をかける。30は染付で、壘付無軸である。31は輪花型打ち成形で、内面に陽刻花文を配する。

32は外面に白泥の痕跡がある。33・34は高台無軸、高台見込みに円刻状の削り痕、33は外面に鉄絵、34は色絵を施す。35は輪花型打ち成形で、底部無軸である。

36は三島暦を写した暦碗で、歴註の配当から1741年(寛保元)に符号する¹⁰⁾。

37は灰白色の硬質胎土に鉄軸をかける。38は体部外面に2条沈線×2がめぐる。39は底部から直立する口縁部で、内耳に上下に貫通する孔を穿つ。40・41は型合わせの馬、42は手づくねの人物である。

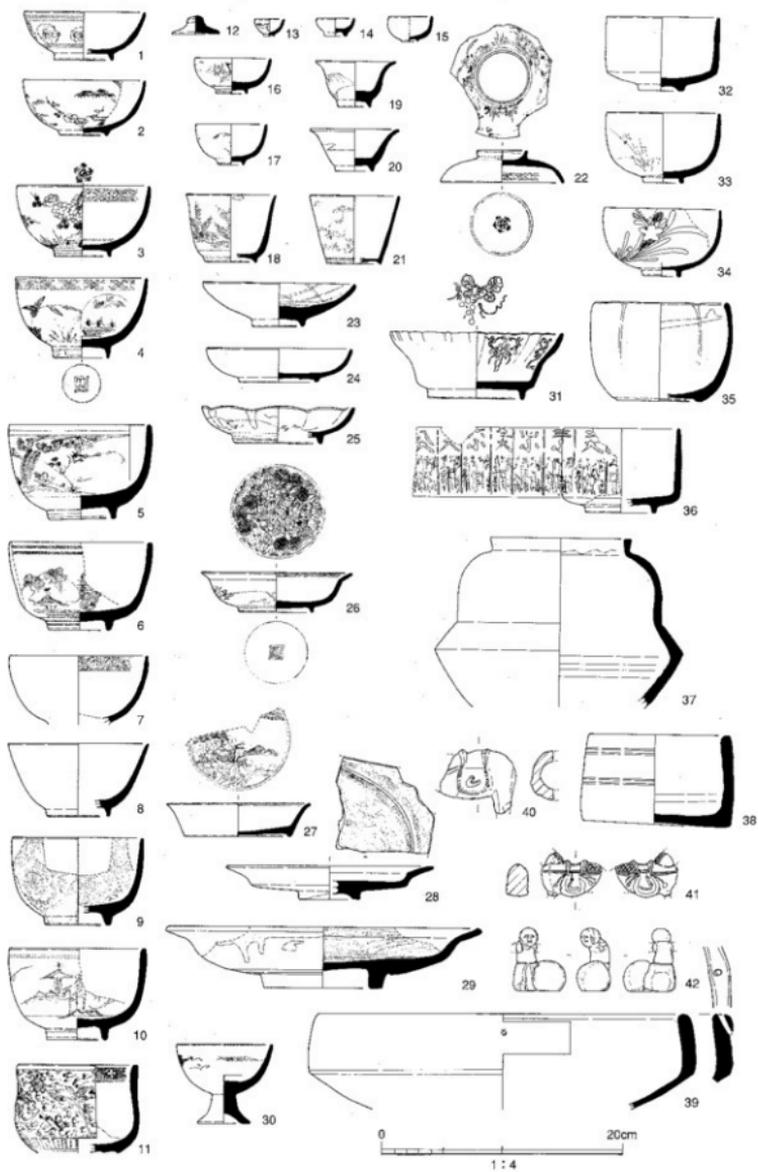


图4 土壤SK01出土遺物

八 大	七 大	六 小	五 大	四 小	三 小	二 大	三
廿十朔 四	廿七朔 三	廿七朔 七九	廿六朔	廿廿廿朔 八四八	十四二朔 八	五七八朔	三
庚八ひう 申七か んん	二巳亥 百ミ 十	庚八土午 申七用 ん	半巳子 夏ミ 生	入庚八未 梅申七 ん	八巳土と 十ミ用ら 八 や	庚八ひさ 申七かる んん	巳 ミ

曆碗 (36) 曆註

土壙 SK02 (図3・5、図版10)

平面形が長径2.8m、短径1.6mの長円形を呈し、深さ50cmを測る。出土遺物には肥前系磁器碗43～46、ミニチュア蓋47、蓋48、坏49・50、小坏51・52、皿53、仏飯器59、肥前系陶器皿54、備前皿55、土師質皿56～58、産地不明陶器火入れ62、瓦質行火63、加工円盤64、砥石65がある。

なお、SK02はSK01と新旧の切り合い関係があり、遺構掘削における遺物の取り上げ時に分離が生じたと考えられる接合資料として肥前系磁器碗60、蓋物61がある。SK02出土遺物として取り扱うがSK01の可能性もある。17世紀末～18世紀前葉である。

43は白磁、44は雨降文、45は外面に二重網目文、高台見込みに二重方形枠内渦福である。46は外面に龍を描く。47は染付で、ミニチュアの合子の蓋、48は蓋物の染付蓋で、口縁端部は無釉である。

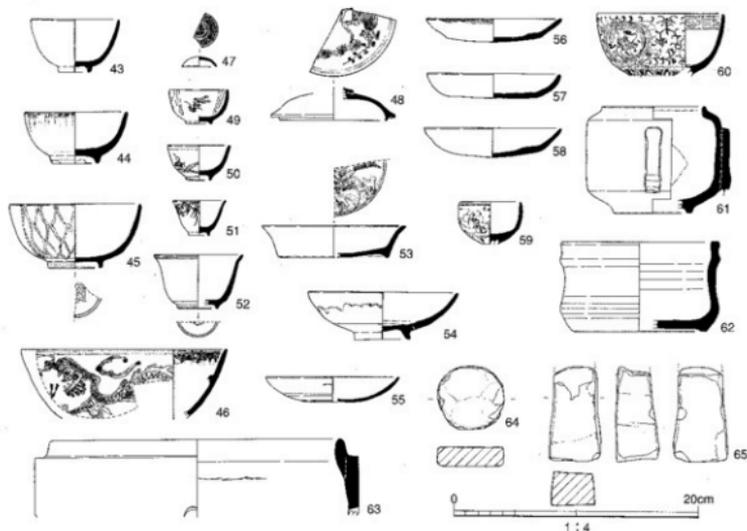


図5 土壙 SK02出土遺物

49は色絵で、型打ち成形の隅入り方形口縁、51は色絵であるが色が抜けている。50・52は染付である。

53は青磁染付、54は淡橙色の硬質胎土に黄褐釉をかけ、見込みは蛇の目釉剥ぎ、高台無釉である。55は口縁部～内面に透明釉をかける。56～58は底部外面に回転糸切り痕、56・58の底部外面には質の子状圧痕もみられ、56の口縁部には灯心油痕がある。

59は染付、60は色絵で体部外面は赤地に金の龍と唐草文、口縁部内面は四方禪文である。61は青磁で口縁端部無釉、体部外面に棒状の粘土紐を三方に貼付る。

63は瓦質で体部に円形の透かしを穿つ。64は瓦素材の加工円盤である。

土壙 SK03 (図3・6、図版11・12)

平面形が長径2.6m、短径2mの不整長円形を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物には、肥前系磁器碗66・67・70、小坏71・72、壺物73、香炉74、皿77～79、肥前系陶器碗68・69、蓋75・76、甕89、京信楽系碗80・81、鍋82、乗燗83、土製品84・85・87、ミニチュア鍋86、瓦質火鉢88、土師質焙烙90、瓦質風炉91、産地不明陶器壺92がある。18世紀前葉である。

66・67は染付、67の見込みは蛇の目釉剥ぎである。68・69は陶胎染付で、壺付無釉である。

70は色絵であるが色が抜けている。71は染付、72は白磁である。73は外面に氷裂文、74は染付で、口縁部内面に四方禪文、蛇の目釉剥ぎ凹形高台である。

75・76は陶胎染付で、見込みは蛇の目釉剥ぎで重ね焼きの痕跡がある。77は染付で、高台見込みに「富貴長春」銘である。78・79は染付で、見込みに手描き五弁花文、79の見込みは蛇の目釉剥ぎである。

80・81は灰釉をかけ高台無釉、80は鉄絵、81は呉須の上絵で高台見込みに渦巻状の削り痕がある。82は体部に褐色釉をかけ底部無釉、口縁部にアーチ状の把手を貼り付ける。

83は淡黄色の軟質胎土の内面に透明釉、84は挽き白、85は型合わせの小槌、86は鍋で鉄釉をかけ底部無釉で三足を貼り付ける。87は型合わせの馬である。

88は口縁部が内湾しながら立ち上がる。89は鉄釉に白泥を塗り鉄釉をかけ流し、底部外面無釉で見込みにはアルミナ砂が付着、底部穿孔し植木鉢に転用している。90は口縁部が底部から内傾し直立する。91は口縁端部を内側に拡張する。92は灰白色の硬質胎土に褐色釉をかけ、外傾する口頸部に凹線、口縁端部を左右に拡張し端面は平坦である。

土壙 SK04 (図3・7、図版13・14)

平面形が長径1.8m、短径1.2mの不整長円形を呈し、深さ30cmを測る。出土遺物には肥前系磁器碗93・94・104、ミニチュア碗101、坏102・103、小坏105～107、皿109～112、香炉117、肥前系陶器碗95～100・108、皿113・114、土師質皿115、産地不明陶器鉢116、土製品118がある。17世紀後葉～18世紀前葉である。

93は白磁、94は染付で一重網目文である。95・96は黄土色の硬質胎土に灰釉をかけ、同一個体と考えられる。

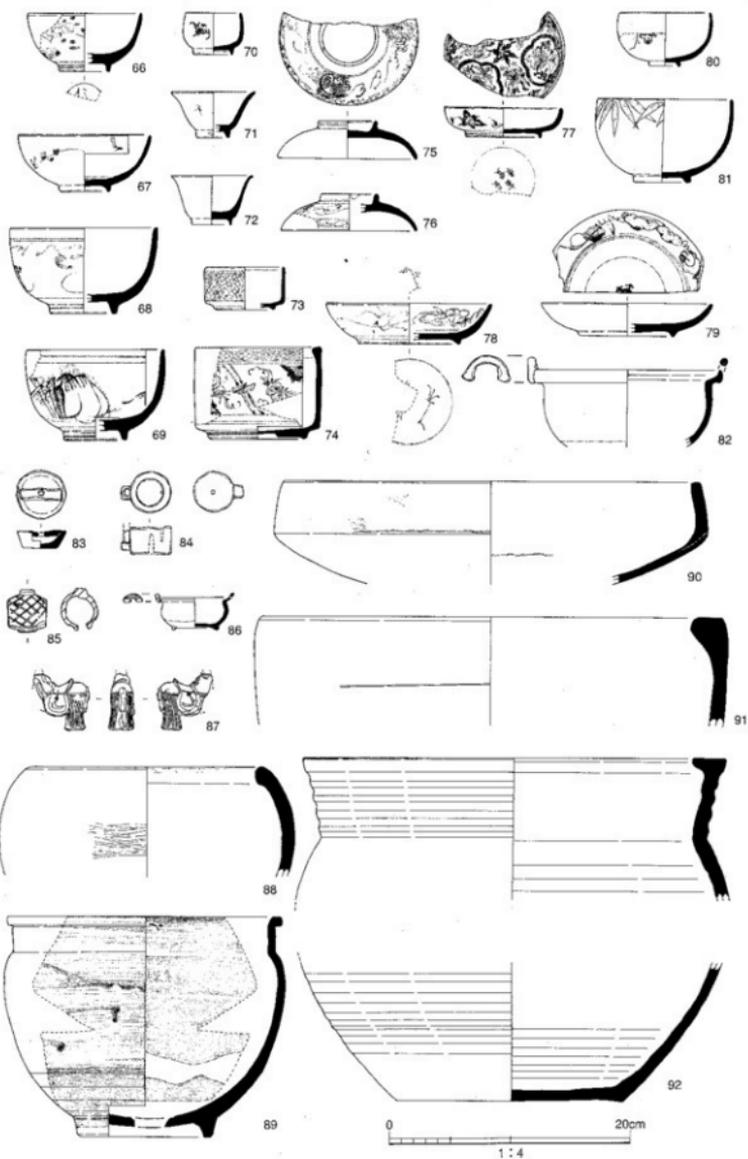


图6 土壤 SK03出土遗物

97・99は灰色硬質胎土に灰釉をかけ、97は兵須で上絵を施し、底部無軸で高台見込みの円刻の削り痕の外側に變形「清水」、99は円刻の削り痕内に変形「清水」の刻印である。98は灰白色の硬質胎土で高台無軸、底部無軸で高台見込みの円刻の削り痕内に変形「雲」の刻印、100は淡黄色の硬質胎土で底部無軸、高台見込みの円刻の削り痕内に「山原住」の刻印である。

101・102は白磁、103・104は染付で、104は口縁部内面に四方禪文、105・106は染付、107は白磁である。108は黄白色の硬質胎土で底部無軸、高台見込みの円刻の削り痕の外側に變形「寶」の刻印である。109は色絵である色が抜けている。110は染付の輪花型打ち成形、111は見込みに「大明化製」銘である。112は見込み蛇の目釉剥ぎで離れ砂が付着、底部無軸で畳付に離れ砂、高台見込みに円錐状の削り痕がある。113・114は高台無軸、見込みは蛇の目釉剥ぎで、113は見込みに離れ砂が付着、114の高台見込みに渦巻状の削り痕がある。115は底部外面に回転糸切り痕と實の子状圧痕、口縁部に灯心油痕が付着している。116は灰釉に鉄と呉須で上絵を施し、口縁部を押圧で輪花状に成形する。117は青磁で体部外面に突線が2条めぐる。118は型合わせの人物像である。

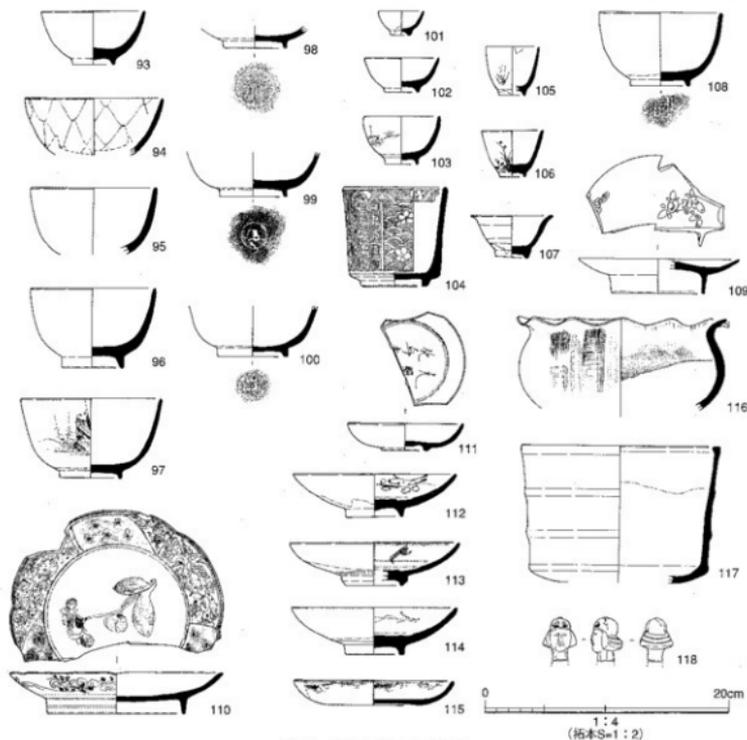


図7 土壌 SK04出土遺物

土壙 SK05 (図3・8、図版4・15)

平面形が長径4.2m、短径3mの不整長円形を呈し、深さ80cmを測る掘形規模の大きな遺構である。壁がほぼ垂直で底部は平坦である。同規模の遺構が隣接し井戸の可能性も考えられたが、井戸側の痕跡がみられず性格については不明である。井戸 SE01が隣接することから、水に関する遺構

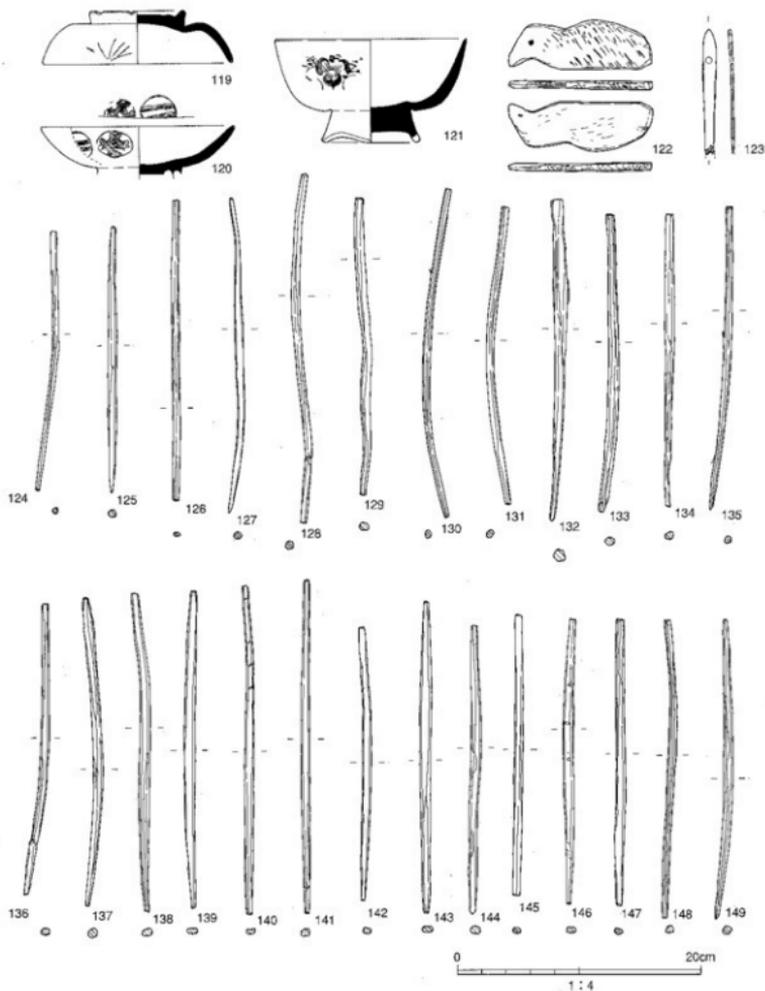


図8 土壙 SK05出土遺物

であるかもしれない。出土遺物には漆器蓋119、漆器碗120・121、鳥形木製品122、漆箸123、箸124～149がある。

119は内外面に黒漆、外面と見込みに赤漆で家紋を配す。120は外面に黒漆に赤漆の文様、内面は赤漆を塗る。121は外面に黒漆に赤漆の花文、内面は赤漆を塗る。122は鳥形に成形し、両面および側面に墨で鳥の目、羽毛を表現する。123は黒漆を塗り、円形の孔を穿つ。

土壇 SK06 (図3・9、図版16・17)

平面形が長辺2m、短辺1.4mの不整長方形を呈し、深さ30cmを測る。SK11と切り合い関係がある。出土遺物には肥前系磁器蓋物150、碗151～153、小坏154～156、鉢162、皿165～168・171・177・178、仏飯器175、瓶176、肥前系陶器碗157～161、皿169・170・179、蓋172、京信楽系碗163、産地不明陶器碗164、蓋173、灯明受皿184、土師質甕174、皿180～183、風炉185・186、加工円盤187、土製品188がある。18世紀前葉である。

150は染付で、口縁端部は無釉、151～153は染付で、151は外面に呉須をかけ高台見込みに銘、152は高台見込みに「□明年製」銘、153は「大明成□年製」銘である。

154は型打ち成形の色絵で、口縁端部に口紅を施す。155・156は染付で、畳付に離れ砂が付着している。157・158は鉄釉をかけ高台無釉、高台見込みに円錐状のケズリ痕がある。

159・160は呉器手で黄白色の軟質胎土に灰釉をかけ、畳付無釉である。161は灰黄色の硬質胎土に灰釉をかけ高台無釉、高台見込みの円刻の削り痕の外側に「小松吉」の刻印がある。162は染付の端反で、畳付無釉である。

163は黄白色の硬質胎土に灰釉をかけた上絵を施し、高台無釉、高台見込みに円錐状のケズリ痕がある。164は内外面に緑釉をかけた口縁、底部無釉である。

165～167は白磁で、166は型打ち成形である。

168は染付で高台無釉、見込みは蛇の目釉剥ぎである。169・170は銅緑釉をかけた高台無釉、見込みは蛇の目釉剥ぎで、高台内に円錐状のケズリ痕、169の見込みに離れ砂が付着している。171は染付で高台無釉、見込みは蛇の目釉剥ぎである。

172は染付の蓋物の蓋で、口縁端部は無釉である。173は土瓶の蓋で、外面に刷毛目状の白泥、内面無釉で底部に回転糸切り痕がある。174は焼塩壺の蓋である。175は染付で、底部無釉である。176は白磁である。

177は染付で、輪花型打ち成形、178は染付で、型押し成形の方形皿、口縁で畳付無釉である。

179は銅緑釉をかけた見込みは蛇の目釉剥ぎで高台無釉、高台見込みに円錐状のケズリ痕がある。

180～183は底部外面に回転糸切り痕、183には糞の子状丘痕もみられる。184は底部外面に回転糸切り痕、仕切りの下部にアーチ状の切り込みを入れる。

185・186は小型の風炉で、口縁部から切り込んだ火窓を設け底部には円柱状の三足を貼り付ける。185は体部背面にヘラ掻き沈線と透かして花文を表現し、体部外面下位に横位のヘラミガキ痕がある。186は火窓の前面に張り出しの灰受けを付ける。いずれも煤の付着が著しい。

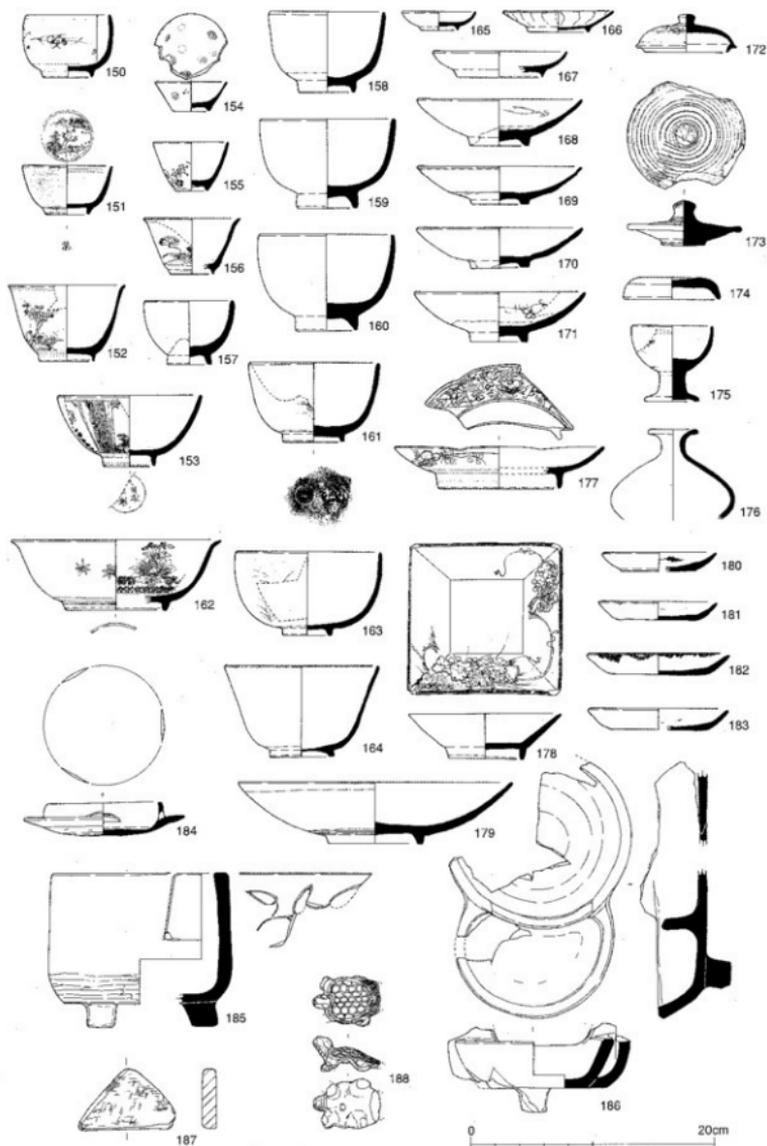


图9 土坑 SK06出土遗物

187は瓦素材で三角形を呈し、表面の研磨痕が著しい。188は土人形の亀で、腹部にヘラの刺突痕がある。

土壙 SK07 (図3・10・11、図版18～20)

調査地外に広がるが、平面形が長辺2.2m、短辺2mの不整長方形を呈すると考えられ、深さ90cmを測る。出土遺物には肥前系磁器碗189・190、192・193、皿194・195、小坏196～198、猪口199、蓋205～210、皿211～216、肥前系陶器碗191、皿217～220、香炉221、産地不明陶器坏201、香炉222、火入れ223、土瓶224、京信楽系坏202、碗203、香炉204、備前灯明受皿225・226、煙管227、ミニチュア蓋228、坏229、土製品230・231、土師質焙烙232、漆器蓋233・234、漆器碗235・236、櫛237、柱238、曲物底板239～241、漆杓子242、箸243～245、下駄246～248がある。18世紀前葉である。

189・190は染付で、口縁部内面に四方禪文、見込みは二重圏線内に花文、189は高台見込みに二重方形枠内渦福である。191は陶胎染付で、壺付無軸で離れ砂が付着している。192は青磁で壺付無軸である。193は底部で屈曲する体部の青磁染付で、口縁部内面に四方禪文、見込みは二重圏線内コンニャク印判、高台見込みは二重方形枠内渦福、壺付無軸で離れ砂が付着している。

194は赤絵、195は染付である。196・197は白磁、198は染付で、見込みに手描き五弁花文、高台見込みは二重方形枠内渦福である。199は白磁、200は染付の蓋物の蓋である。

201は灰白色の硬質胎土に灰釉をかけ、高台無軸である。202・203は淡黄色の硬質胎土に灰釉をかけ、202は緑・赤・黒の上絵、203は鉄絵、高台無軸である。204は淡黄色の硬質胎土に灰釉をかけ鉄絵、内面無軸で底部に三足を貼り付ける。

205～208は青磁染付で、口縁部内面に四方禪文、205の見込みは二重圏線内にコンニャク印判の五弁花文、206の見込みは二重圏線内手描き五弁花文で、高台内は二重方形枠内渦福、207の見込みは二重圏線内に花文で、高台内は二重方形枠内渦福である。208の見込みは二重圏線内にコンニャク印判の五弁花文である。

209・210は染付の蓋物の蓋で、口縁部は無軸である。211・212は青磁染付で、輪花型打ち成形で見込みは二重圏線内手描き五弁花文、高台見込みは二重方形枠内渦福、212の見込みは松竹梅と考えられる。

213～216は染付で、見込みは蛇の目軸剥ぎ、高台無軸で離れ砂が付着、213の高台見込みにには円錐状の削り痕がある。217～220は銅緑釉をかけ見込みは蛇の目軸剥ぎ、離れ砂が付着し重ね焼き痕、高台無軸である。

221は青磁で内面無軸、蛇の目軸剥ぎ凹形高台である。222は淡乳白色の硬質胎土に灰釉、底部無軸である。223は灰白色の粗胎土の外面に灰釉、口縁部に敲打による剥離痕がみられる。底部外面に「〇」の刻印がある。

224は褐色釉をかけ、口縁部と底部は無軸である。225・226は仕切りに浅い挟りが入り、口縁部に灯心油痕、225は内面に透明釉をかける。227は銅製の雁首、228は合子の蓋で外面灰釉に上絵を施す。229は淡黄色の硬質胎土で内面に灰釉をかける。230は型合わせの魚、231は陶器の犬で灰釉



图10 土壤 SK07出土遗物

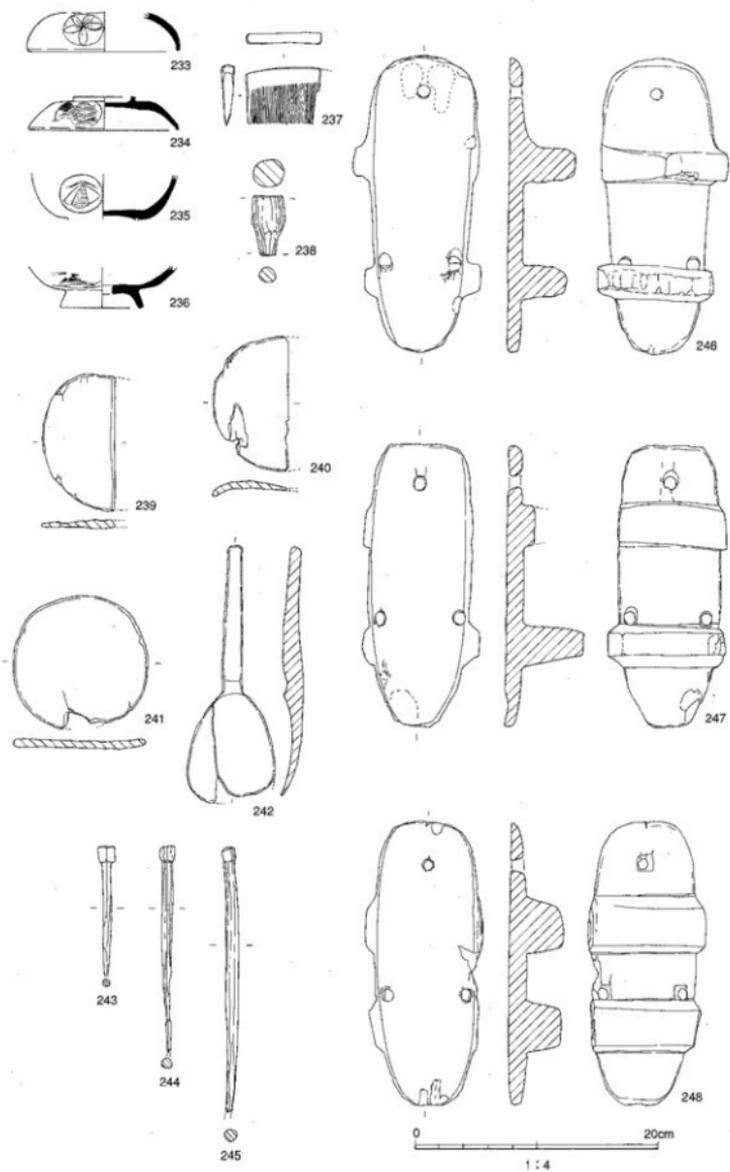


圖11 土境 SK07出土遺物

をかける。232は口縁部が内傾し直立し、内耳に貫通する孔を穿つ。

233～235は内外面に赤漆、外面に黒漆の文様、236は外面は黒漆に赤漆の文様、内面は赤漆である。246～248は連齒下駄である。

土壙 SK08 (図3・12、図版21)

平面形が辺1.2mの方円形を呈し、深さ30cmを測る。出土遺物には、肥前系磁器碗249～252、京信楽系ミニチュア香炉253、備前皿254がある。18世紀後葉である。

249は高台外側に「○×」文である。250は赤絵染付で、見込みに手描き五弁花文、高台見込みに一重圏線内渦渦である。251は口縁部内面に四方樺文である。252は青磁染付で、口縁部内面に四方樺文、見込みに二重圏線内に花文、高台見込みに「大明□化年製」銘の口鏝である。

253は淡黄色の硬質胎土に灰釉をかけ、内面無釉、底部に三足を貼り付ける。254は口縁部に灯心油痕がある。

土壙 SK09 (図3・12、図版21)

平面形が長辺2m、短辺95cmの長方形を呈し、深さ130cmを測る。出土遺物には、肥前系陶器碗255・256、皿258・260～262、土師質皿257、瀬戸美濃系陶器皿259がある。17世紀前葉である。

255は灰白色の粗胎土に灰釉をかけ底部無釉、256は高台が低く無釉、高台見込みに円錐状の削り痕がある。257は口縁部に灯心油痕が顕著である。258・260は灰釉をかけ、高台無釉、見込みに胎土目跡、260は高台見込みに円錐状の削り痕がある。259・261は灰釉をかけ畳付無釉、262は高台脇と高台の区別が明瞭でなく、高台見込みに円錐状の削り痕がある。

土壙 SK10 (図3・12、図版21・22)

調査地外に広がり平面形が長径3m、短辺1.2mの溝状を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物には、肥前系陶器碗263・264、皿273・274・276・277、坏266、小坏267・268、肥前系陶器碗265・269～272、皿275・278、京信楽系蓋物279、土師質皿280～282がある。18世紀前葉である。

263は染付、264は赤絵染付で、高台見込みに「大明年製」銘で口鏝、265は白化粧土に上絵を施す。

266は染付で雨降文、267は白磁、268は色絵であるが色が抜け、口鏝である。269は鉄釉をかけ高台無釉である。270・271は呉器手、272は外面に白泥による刷毛目文、273・274は染付、275～278は見込み蛇の目軸刺ぎ、高台無釉である。279は灰釉をかけ上絵を施す。

280の底部外面には貫の子状圧痕、281・282は回転糸切り痕である。

土壙 SK11 (図3・12、図版22・23)

平面形が残存長辺3m、短辺1mの溝状を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物には、肥前系磁器碗283、肥前系陶器碗284～287、肥前系磁器壺288・皿291、小坏289、京信楽系蓋290、土師質皿292がある。17世紀末～18世紀前葉である。



図12 土壌SK08 (249~254)、SK09 (255~262)、SK10 (263~282)、SK11 (283~292) 出土遺物

283は染付、284は灰釉をかけ、285は見込みに蛇の目軸剥ぎ、重ね焼き痕がある。286は高台見込みの円刻削り痕内に「木下弥」、287は高台見込みの円刻削り痕にまたがる変形「清水」である。

288は蓋物の蓋、289は白磁、290は土瓶の蓋で灰釉をかけ、高台無軸である。291は見込み蛇の目軸剥ぎで重ね焼き痕、292は底部外面に回転糸切り痕と簧の子状圧痕、口縁部に灯芯油痕がある。

土壙 SK12 (図3・13、図版23)

調査地外に広がり遺構形態が不明であるが、平面形の長径 $2.4m+a$ 、短径 $1.8m+a$ の長円形を呈すると考えられ、深さ50cmを測る。出土遺物には、瀬戸美濃系陶器皿293~295、漆器椀297・298、箸299~318がある。17世紀前葉である。

293は折縁状口縁のソギ皿である。294・295は底部外面にヘラ切り痕がある。297は内外面に黒漆、298は内外面に黒漆、外面に赤漆で花文、焼成を受け炭化している。

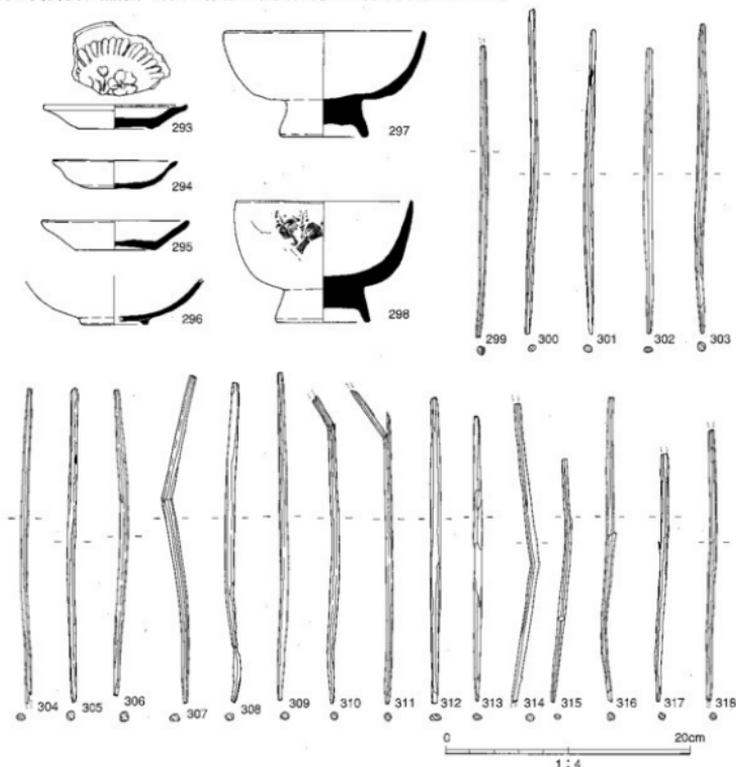


図13 土壙 SK12 (293~295・297~318)、石室 SN03 (296) 出土遺物

(3) 石室 SN01~03 (図3・13、図版5・23)

SN01は平面形が残存長辺1.7m、短辺1.3mの長方形、深さ30cm、SN02は平面形が長辺1.7m、短辺1mの長方形、深さ40cm、SN03は平面形が長辺2m、短辺90cmの長方形、深さ70cmを測り、壁面に結晶片岩の石組を施す貯蔵用の石室である。SN01は南辺の石組を欠落する。

出土遺物はSN03から瓦器埴296がある。296は底部が矮小化し、表面は磨滅、混入遺物である。

(4) 井戸 SE01 (図3・14・15、図版24~27)

SE01は掘形の平面形が径3mの不整形円形を呈し、井戸側は径80cmの円形を呈する。井戸側施設は竹製の籠がみられることから桶積み上げと考えられるが、板材が残存せず桶材の抜き取りが想定

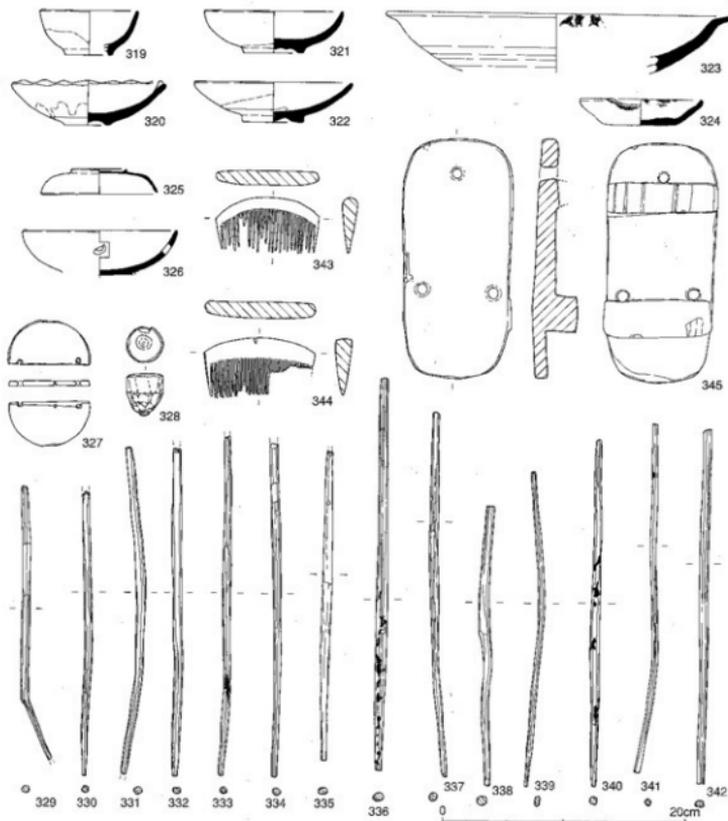


図14 井戸 SE01出土遺物

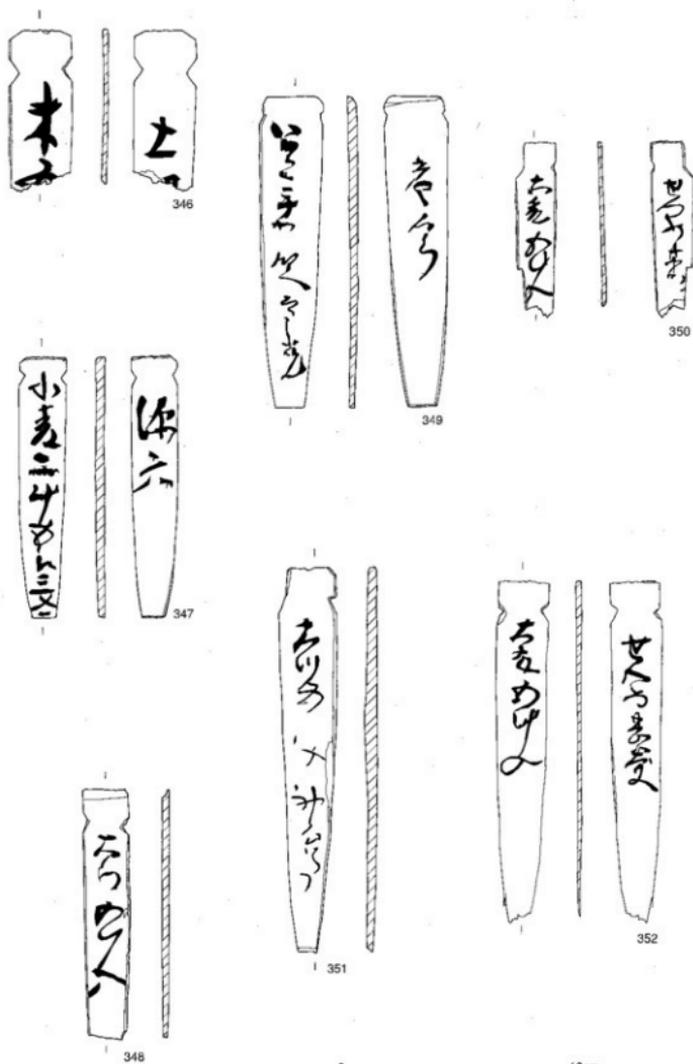


図15 井戸 SE01出土遺物

される。出土遺物には、SE01井戸側から肥前系陶器杯319、皿320～323、土師質皿324、漆器蓋325、漆器碗326、曲物327、独楽328、箸329～342、櫛343・344、下駄345、荷札木筒346～352がある。17世紀後葉である。

319～322は灰釉をかけ、高台無軸、320は高台脇との境界が不明瞭で、高台見込みに円錐状の割り痕、口縁部は押圧によるなぶり口である。321は高台見込みに渦巻き状の割り痕、322は見込みに胎土目跡である。323は外反する口縁部に鉄絵を施す。324は底部回転糸切り痕で、口縁部に灯芯油痕がある。325は内外面に黒漆、326は外面に黒漆、内面は赤漆である。332は連歯下駄である。

346～352は荷札木筒である。年貢として供された「米・小麦・大麦・大つ（大豆）」、350・352には稲田の領地「せつめ」（瀬詰・山川町）が記載されている。米・大麦・大つは五斗単位であるが、347の小麦は2斗5升3合と変則であり、麦年貢の徴収率の複雑さを示していると考えられる。

346	347	348
・ ∇ 米五	・ ∇ 源六	・ ∇ 大つ五斗入
・ ∇ 土口	・ ∇ 小麦二斗五升三合	
(63)×23×2	(106)×19×3	(102)×18×3
349	350	351
・ ∇ 右衛門	・ ∇ せつめ 基口	・ ∇ 大つ五斗入 初口門
・ ∇ 三口口口口口口書也		
155×26×4	(72)×16×2	(157)×23×6
		352
		・ ∇ せつめ 甚大夫
		(137)×23×3

(5) 井戸SE02・03 (図3・16、図版7・28)

SE02・03は切り合い関係を呈し、SE03設置時にSE02の井戸側の一部を破壊している。掘形が一部重複しているが、SE02は径3.2mの不整形円形を呈し、井戸側は径70cmの桶積み上げで下位4段を確認している。下位3段目の桶が2段目を覆い通常の積み方とは異なる。また、上位桶材が内側に

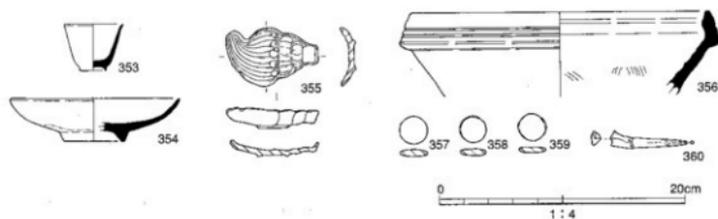


図16 井戸 SE02出土遺物

折れ曲がっている。井戸廃絶に伴う意識的な行為の痕跡であるのか、木材の劣化に伴うものであるのか不明である。SE03は掘形が調査地外に広がるが、掘形は長径3m、推定短径2.6mの長円形を呈し、井戸側は径80cmの桶積み上げで下位2段を確認している。

SE02掘形から肥前系磁器小坏353、皿354、ミニチュア陶器皿355、備前挿鉢356、基石357～359、煙管吸口360がある。17世紀後葉である。

353は白磁、354は見込みは蛇の目軸剥ぎ、高台無軸である。355は型押し成形のホラ貝型である。356は口縁部内面に凸帯がめぐる。

(6) Pit01 (図3・17、図版7・29)

径20cmの平面形が円形を呈し、深さ7cmを測る銅銭埋納ピットである。中国銭24枚が土師質皿4枚で覆われた状態で出土している。皿361～364は口縁部が外反し底部外面に回転ヘラ切り痕がある。

表1 Pit01出土中国銭一覧 (銭貨名の判明したもの16枚) (a:縦 b:横)

No	銭貨名	国・王朝	初鋳年	銭径 a (mm)	銭径 b (mm)	備 考
375	開元通寶	南唐	960	22.9	22.9	
376	政和通寶	北宋	1111	24.5	24.5	
377	祥符元寶	北宋	1009	24.5	24.5	
378	朝鮮通寶	朝鮮	1423	24.5	24.5	
379	祥符口寶	——	——	22.9	23.0	
380	祥符通寶	北宋	1111	25.0	25.0	
381	聖宋元寶	北宋	1101	24.1	24.2	
382	洪武通寶	明	1368	23.1	23.5	
383	祥符通寶	北宋	1111	25.0	25.1	
384	元豊通寶	北宋	1078	24.6	24.6	
385	淳化元寶	北宋	990	24.1	24.1	
386	咸平元寶	北宋	998	24.1	24.1	
387	元祐通寶	北宋	1086	24.5	24.5	
388	元祐通寶	北宋	1086	24.4	24.4	
389	紹聖通寶	北宋	1094	25.0	25.0	
390	宋通元寶	北宋	960	25.1	25.6	

(7) 溝SD01 (図3・17、図版7・28)

幅1.8m、深さ40cmを測る東西方向の取束する溝である。出土遺物には、土師質皿365・366、壺367、羽釜368・369、鍋372・373、備前播鉢370、壺371、ガラス玉(写真図版:374)がある。

365・366は底部外面回転ヘラ切り痕、369は短く外反する口縁部、368・369は内傾する口縁部を呈し、口縁部直下に鈎を貼り付け、体部外面はタタキである。370は口縁端部を面取り、371は玉縁状口縁である。372・373は口縁部下角が鈎状に突出する。

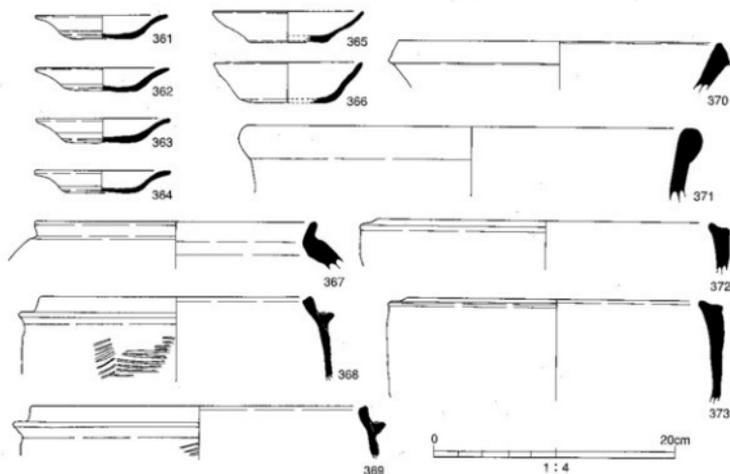


図17 Ph01 (361~364)、溝SD01 (365~374) 出土遺物

5 調査成果のまとめ

徳高藩中老・稲田勘解由の屋敷は約4,600㎡の広大な敷地である。城下町絵図の記載から今回の調査地の位置は、淡路街道に面する稲田屋敷の表側であり、門や本宅などの構造物を示す遺構が想定されたが、調査地南側において連続集する土壌群、井戸や石室などの遺構配置からは、屋敷の表側よりはむしろ裏側に近い土地利用の様相である。調査地南側では掘立の柱穴が数多くみられるが、柱穴間隔や柱穴配列から建物跡としてとりまとめることができない。簡易な構造物が想定されるものの、屋敷の主要建物としての構成は考え難い。ただ、これらの遺構は18世紀代を中心とするものであり、稲田屋敷における本来の土地利用の在り方と考えられる。

一方、調査地の北西隅で確認した掘立柱建物跡 (SB01) と考えられる柱穴は、柱穴掘形の規模や礎板石の使用から稲田屋敷本宅の一部と考えられる。この場合、稲田屋敷の間口が南の淡路街道に面していたとするなら、門や本宅は屋敷地の西側寄りに構えられていたと考えられ、調査地南側に集中する土壌群は屋敷隅での廃棄処理を伴う土地利用として理解できる。また、井戸や石室など

の水場や貯蔵場の配置についても妥当性をもつ。

出土遺物には、肥前系陶磁器、京信楽系、瀬戸美濃系、備前焼のほか、漆器椀・蓋、箸、櫛、下駄、独楽、鳥形、荷札木簡などの木製品がある。中でも京信楽系の三鳥暦を写した暦茶碗は、これまでの城下町跡の調査においても少量の出土はみられるが、一～八月が残る残存状況が良好な資料である。暦註には雑節のひかん（彼岸）・八十八や・入梅・半夏生・土用・二百十（二百十日）があり、ひかんは二月（春）と八月（秋）、土用は三月（春）と六月（夏）の二度記されている。また、選日として八セン（八専）・庚申・巳ミ（巳巳）がある。暦茶碗には注連縄文も併せて描かれるものもあることから、年始などの祝い時に用いられたと考えられる。

また、荷札木簡には稲田の記載はみられないが、徳島藩の地方知行を裏付ける資料とされる。米年貢以外に大麦・小麦・大豆が年貢として納められていることを示し、畝作物の徴取物の内容や数量の一端が窺える。

今回の調査では、蜂須賀入国以前に遡る遺構・遺物を確認している。城山南東域における中世遺跡（洞山城関連遺跡）は、1999年の調査⁽¹⁾で明確にしているが、Pit01およびSD01は当該地における中世遺跡の広がりを示している。また、SD01が収束する区画溝としての性格を有するならば、周辺地域が城山を中心とした生活領域の南限を示すものであるかもしれない。中世遺構の年代観については、Pit01出土の中国銭に初鋳1423年の朝鮮通寶が含まれるが、出土遺物から16世紀後葉と考えられる。

（注）

- (1) 暦註の配当年号については、稲垣正宏氏より御教示をいただいた。
- (2) 徳島市教育委員会「徳島市埋蔵文化財発掘調査概要」13、1999年。

II 矢野遺跡

1 遺跡の立地と歴史的環境

矢野遺跡は鮎喰川水系の旧河川が形成した標高 T.P.+7 m 前後の沖積微高地に位置する縄文時代中期～中世に至る集落遺跡である。かつては、四国電力国府変電所構内を中心に広がる弥生時代後期の集落遺跡としての評価にとどまっていた。また、出土遺物の中には製作手法や形態、さらには分布圏においても独自性が認められ、それらの一群に対して「矢野式」¹⁰⁾の名称が付された経緯がある。後年、この土器群は、吉野川下流左岸の黒谷川郡頭遺跡でも確認されるようになり、吉野川下流域における弥生時代後期～古墳時代前期初頭にかけて、朱の撥出に伴い畿内や東部瀬戸内の地域に分布する土器型式「東阿波型土器」¹¹⁾として提唱されるようになる。

1992～1998年(平成4～10)に実施された矢野遺跡を南北に縦断する徳島南環状道路建設工事に伴う調査は、これまで矢野遺跡に対する評価を大幅に書き換えるものである。この調査では100棟以上におよぶ弥生時代中期末～後期の堅穴住居跡を確認し、県下でも最大級の集落遺跡であることが判明した。中でも、1993年に弥生時代後期末の集落内で発見された突線鈕5式の銅鐸は、埋納時に木製容器に入れられた特殊な埋納法が考えられ、埋納坑周辺の柱穴配置から覆屋が復原されている。

1993年(平成5)の調査¹²⁾では、蛇紋岩製の勾玉製作工房の検出や朱の付着した土器や石杵、吉備や讃岐産の搬入土器の出土、1994年(平成6)の調査¹³⁾では、弥生時代中期末～後期初頭の鍛冶遺構が発見されている。朱の精製や流通をはじめ、弥生時代中期～後期にかけての拠点集落としての役割を果たした遺跡として評価されている。

さらに、1995年(平成7)の調査¹⁴⁾では、縄文時代中期末～後期(中津Ⅰ・Ⅱ式、福田Ⅱ式・緑帯文成立期)の遺構・遺物が確認されている。多量の土器の中には水銀朱が塗られたものがあり、朱の精製に使用されたと考えられる磨石が出土している。1996年の調査¹⁵⁾では土製仮面が出土するなど、これまでに類例のない縄文時代に関する情報が得られている。

古代以降についての調査成果の蓄積にも目ざましいものがあり、1994・1995年(平成6・7)の調査では9～10世紀代の堅穴住居跡・掘立柱建物跡群の検出、阿波国分寺跡東域での道路遺構の発見がある。また、1999～2001年(平成11～13)の調査¹⁶⁾¹⁷⁾では、掘立柱建物跡群で構成される阿波国府跡関連遺構(曹司)の確認がある。

2 調査に至る経緯と経過(図1・2)

今回の調査は水道管理用道路建設工事に伴う調査で、2004・2006年(平成16・18)に実施した。調査地は1996・1997年(平成8・9)に実施した市道改良工事に伴う調査地¹⁸⁾の北端から北と西に分岐する。1996・1997年の調査では遺構密度が極端に薄い状況であり、調査地周辺は弥生時代の集落の中心から外れた地域に該当する可能性が考えられた。道路建設計画に従い試掘調査を実施した結果、包含層の有無、遺構検出ベース層の状況を考慮した上で、2004年は16-1～3区、2006年は18-1～10区の調査区において調査を実施した。



図1 調査地位位置図



図2 調査地概略図、遺構配置略図

3 平成16年度の調査成果

(1) 基本層序 (図3)

調査地周辺の標高はT.P.+8～8.2mを測り、南から北へ緩やかに低傾斜している。現代水田耕土層下に第1～3層が堆積する。以下、上位より概略する。

第0層：現代水田耕作土であり、16-1区と2区で20cmの比高差がある。

第1層：旧水田耕作土で1-a層と1-b層に細分される。

1-a層：層厚10～15cmを測る黄色砂質シルトの旧耕作土である。

1-b層：層厚5～10cmを測る黄灰色砂質シルトの旧耕作土である。

第2層：層厚10～20cmを測る灰色砂質シルトで、上位にFeの沈殿がみられる。弥生時代中期の包含層と考えられる。

第3層：黄色砂質シルトで遺構検出ベース層である。16-1区以北および3区以南では灰色細～粗砂に変化する。

(2) 遺構と遺物

i) 竪穴住居跡 SA01 (図4・5、図版30・38)

16-1区において平面形が方形を呈する遺構の一部を検出している。壁面において炉跡と考えられる炭化層の土壌状の落ち込みがみられることから、住居跡の可能性がある。

出土遺物には、甕1・2がある。1の口縁端部は上方に積み上げ風で、端面は平坦、体部内面はヘラケズリが施される。2は長胴形の体部で、内面には横位ヘラケズリが施される。

ii) 竪穴住居跡 SA02 (図4・5、図版30・38・39)

16-1区において全形のはぼ1/3を検出し、平面形が推定径5mの不整形を呈する住居跡である。壁高40cmを測り、壁間溝はみられない。

出土遺物には、広口壺3～6、直口壺7、甕8～12、高坏13がある。3～6は直立する頸部から短く外反する口縁部で、口縁端部を上下に伸ばし端面に2～6条の凹線文がめぐる。5は貝殻状の刺突文が施され、6は円形浮文が貼り付けられる。7は直立する頸部に6条凹線文と刺突文、口縁端部は平坦である。

8・9は口縁端部を上下に拡張し端面に2条凹線文、10・11の口縁部端面は平坦、12は口縁端部を上方に伸ばし、端面に2条凹線文、体部に貝殻状の刺突文がめぐる。

13は脚端部を上方に拡張し端面に2条凹線文、坏との接合は円盤充填である。

iii) 方形周溝墓 SL01～03 (図4・5、図版30・31・39)

16-2・3区で周溝墓の一部を検出している。周溝は幅1.1m、深さ20cmを測り、SL01と02は周溝の一部共有し、SL02は周溝の一部が途切れている。SL03の周溝は幅80cm～1m、深さ20cmの収束する溝である。SL02の周溝から、甕14、把手付高坏15が出土している。

14の口縁部端面はナデにより凹面を呈し、端部が上下に伸びている。15は体部から直立する口縁部の外面に2条凹線、接合は円盤充填である。

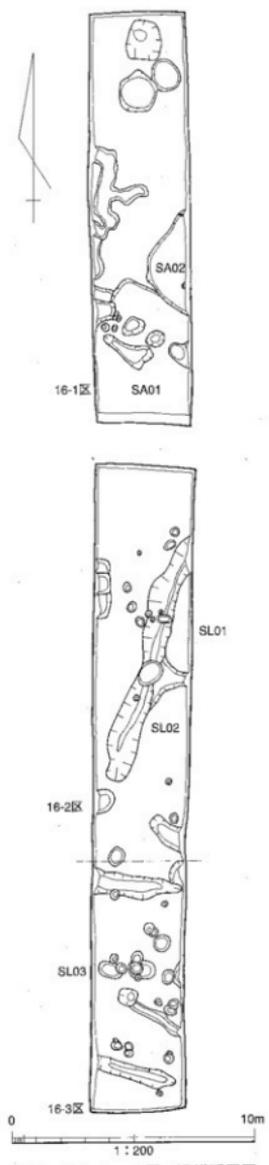


図4 16-1~3区 遺構配置図

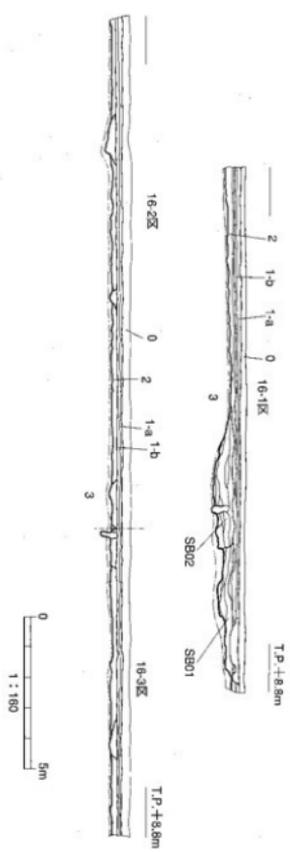


図3 16-1~3区 東壁断面土層図

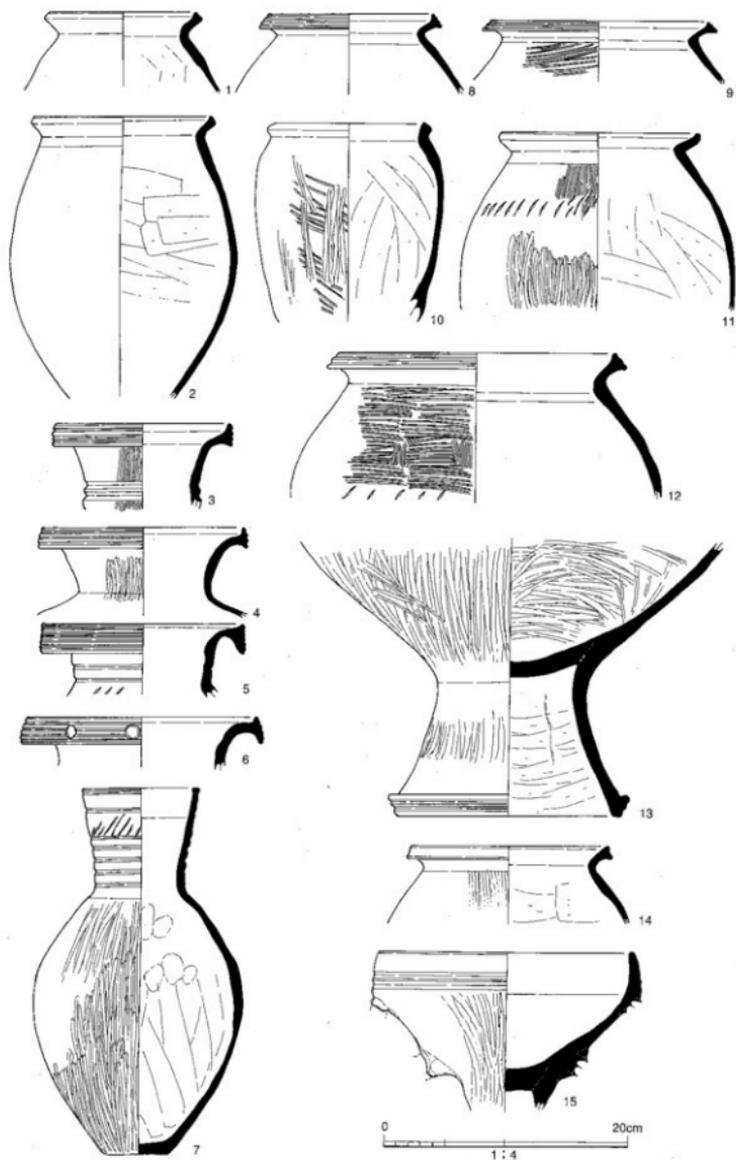


图5 16-1区 豎穴住居跡 SA01·02、16-3区 方形周溝墓 SL02出土遺物

4 平成18年度の調査成果

(1) 基本層序 (図6)

調査地周辺の標高は T.P.+8.6~8.8mを測り、東から西へ緩やかに低傾斜している。現代水田耕土層下に第1~5層が堆積する。以下、上位より概略する。

第0層：現代水田耕作土である。

第1層：旧水田耕作土であり、Feの酸化沈殿層の細分により、1-a層と1-b層に細分される。

1-a層：層厚10cmを測る黄色砂礫混じりシルトで、下にFeの酸化沈殿層がみられる旧耕作土である。

1-b層：層厚10~20cmを測る黄灰色砂礫混じりで、下にFeの酸化沈殿層がみられる旧耕作土である。

1-a・1-b層はともに下にFeの酸化沈殿層がみられることから灌漑による水田経営の痕跡を示している。1区では1-a・1-b層の分離が明瞭であるが、4~10区においてはFeの酸化沈殿層が多層化し分離が明瞭でない。

第2層：層厚10~20cmを測る灰色砂礫混じりシルトで、5・6区および7区の一部で堆積がみられる。10世紀代の土師器・須恵器・瓦を含む包含層である。

第3層：層厚10~30cmを測る黒色砂質シルトで、1・2・4区で堆積がみられる弥生時代後期の包含層と考えられる。

第4層：層厚10~30cmを測る黄灰色砂質シルトで、弥生時代中期の包含層と考えられる。

第5層：淡黄色~黄灰色シルト~灰黄色砂礫の遺構検出ベース層で、検出標高は4区では砂礫層が検出され T.P.+8.3mと最も高く、1・10区では T.P.+7.9mと低下する。

(2) 調査の概要 (図7)

調査区は幅3m、延長200mの当該地を東西に貫くトレンチ調査的な配置であり、遺跡の概要を知る上では効果的である。調査では第5層上面において、弥生時代前期~古代に至る遺構・遺物を確認している。

18-1・2区は遺構や遺物の検出状況から、集落の中でも遺構密度が希薄な空間の一部と考えられる。3区では古墳時代以降の溝や土壌を検出、4区では弥生時代後期の土壌からの良好な一括資料がある。4区西端~5区には、第5層の堆積過程で生じたとみられる凹地状の落ち込みがある。7区でも同様な旧地形の変化による自然凹地がみられることから、この付近では第5層以下において平坦面の形成がスムーズに行われなかったと考えられる。これらの自然凹地からは、弥生時代前期末~中期の遺物が出土している。5~8区では、現存条里地割方位に一致しない多条の溝がみられる。溝の時期については不明瞭であるが、これらの溝の底部にはFeの酸化沈殿が顕著であり、かつて水流を伴う灌漑用の溝として機能していた可能性がある。現在、5区以西に残る字名「溝添」と関連するものであろうか。18-9・10区では弥生時代中期の方形周溝墓を確認している。住居跡群と方形周溝墓群とで構成される小集団の広がりが想定される。

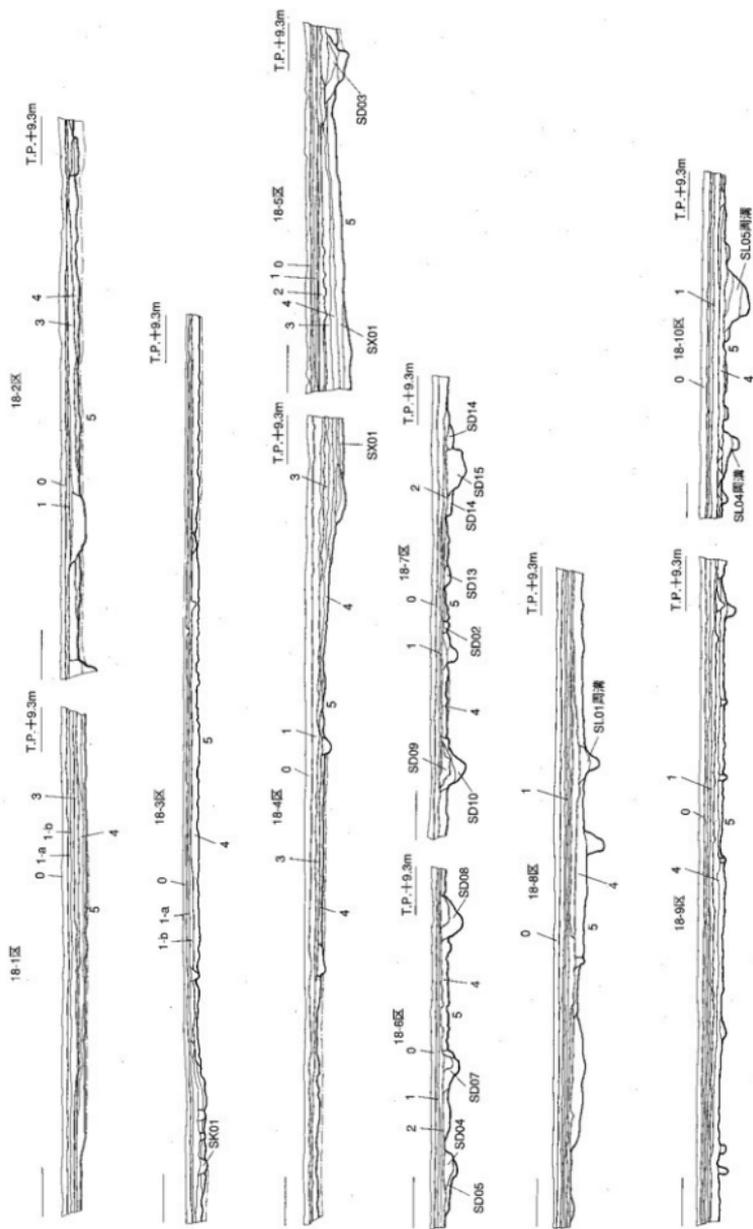


图6 18-1~10区 南崑断面土層図

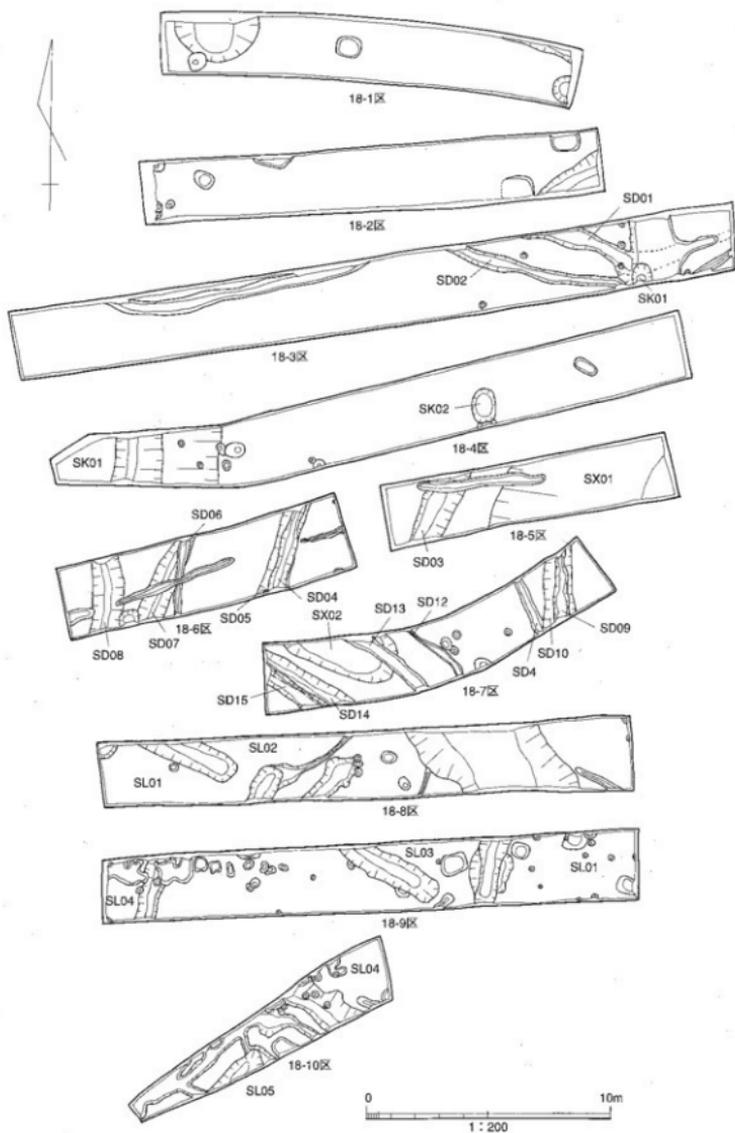


図7 18-1~10区 遺構配置図

5 遺構と遺物

18-1~10区において検出した、主な遺構と遺物について記す。

i) 土壌 SK01 (図7・8、図版32・33・40)

18-3区において全形の1/2を検出し、平面形が径60cmの円形を呈し、深さ30cmを測る土壌である。出土遺物には土師器甕16、鍋17がある。

16は回転台成形で、斜め上方に直線的に立ち上がる体部で、口縁端部は丸くおさめる。赤色塗彩の痕跡がある。17は平底の甕で、口縁部に穿孔が2箇所みられる。

ii) 溝 SD01 (図7・8、図版32・40)

18-3区において検出した幅60cm~1m、深さ10cmを測る溝である。北西~南東方向の溝で調査内で屈曲し北東方向を示しSD02と並行する。出土遺物には土師器ミニチュア18、高坏19、甕20・21がある。

19は坏底部で屈曲し斜め上方に直線的に立ち上がる体部である。20・21は球状の体部で、20は口縁端部をわずかに肥厚させる。

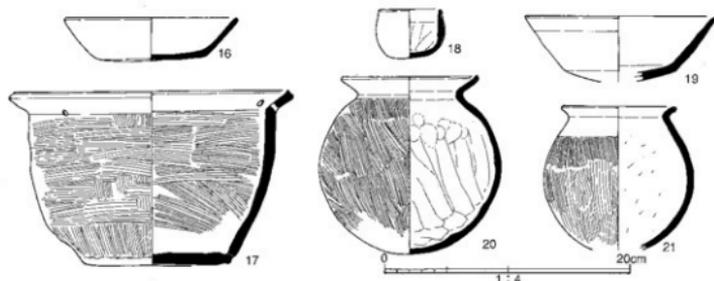


図8 18-3区 土壌 SK01 (16・17)、溝 SD01 (18~21) 出土遺物

iii) 土壌 SK02 (図7・8、図版32・34・41・42)

長径1.3m、短径1m、深さ30cmを測り、平面形が長円形を呈する。上位埋土は黒色シルトであるが、下位は浅黄色シルトに変化する。上位層から甕22~27、鉢31、下位層から甕28~30が出土している。

22~27は小型の甕で、22は口縁部の屈曲が緩く、端部は丸くおさめる。23・24は口縁端部上端を摘み上げ風に仕上げ、端面はわずかに凹面を呈する。25は口縁部の断面形が方形を呈する。26は口縁部の断面形が方形であるが、口縁端部のナデにより端面はわずかに凹面を呈する。27は口縁端部を上方に摘み上げ、端面には擬凹線がめぐる。22~27の体部外面は(タキ後)ハケ、体部内面は(ハケ+)ヘラケズリで、底部は完全に丸底化せず、底部外面にハケが施される。

28~30は口縁端面に擬凹線あるいは凹面を呈し、体部最大径はやや下がった位置にあり、口縁部径に対する比率は大きい。

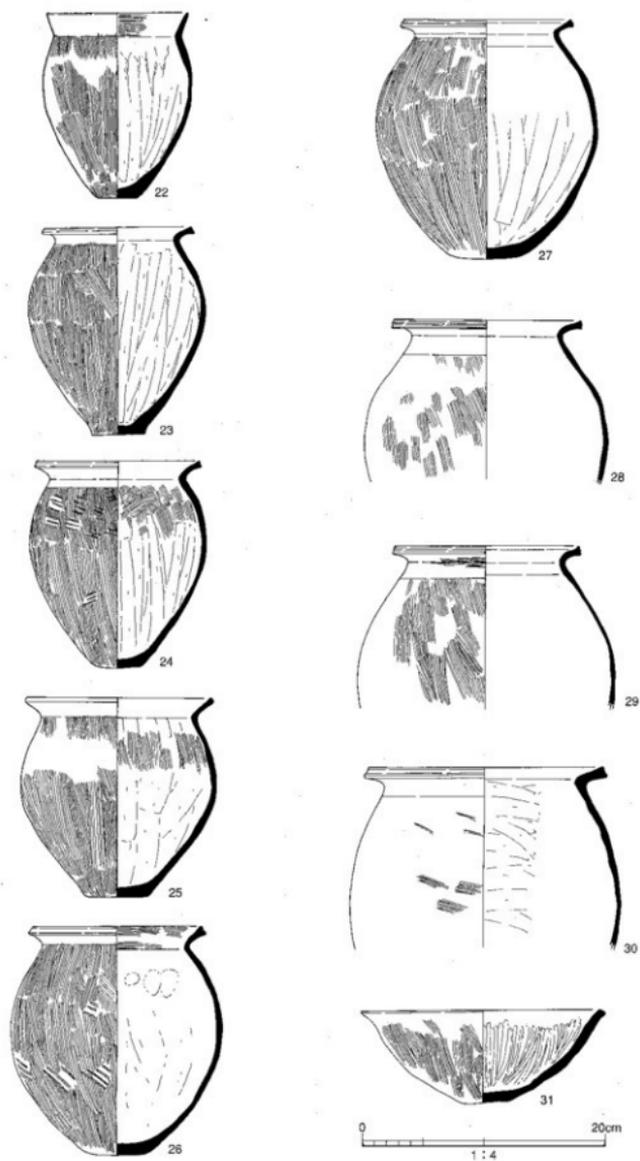


图9 18-4区 土坑 SK02出土遗物

iv) 自然凹地 SX01 (図7・10、図版34・43)

18-4~5区において、幅11.5m、深さ40cmを測る凹地であり、平面形状は不明である。第5層の堆積過程で生じた旧地形の凹部であり、形成要因については明確でない。出土遺物には、直口壺32、甕33~36がある。

32はわずかに内湾しながら立ち上がる頸部外面に構描直線文+弧文を施す。33~36は如意形口縁を呈し、33~35は口唇端部に刻目を施す。33は底部に穿孔、34は口縁部直下に幅厚の1条の貼付突帯に刻目、体部外面には構描波状文+直線文を施す。35は頸部直下に4条沈線、36は構描直線文が施される。

v) 自然凹地 SX02 (図7・11、図版35・44)

18-7区において検出し推定幅2.5m、深さ25cmを測る長円形を呈する凹地である。SX01と同じく旧地形の凹部である。

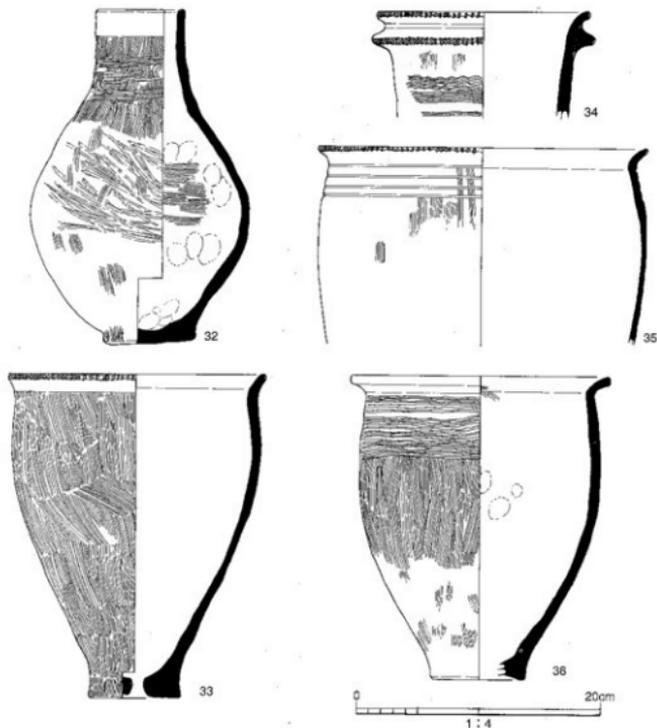


図10 18-5区 自然凹地 SX01出土遺物

出土遺物には広口壺37がある。37は外傾する頸部から外反する口縁部を持ち、口縁端部断面形は方形を呈する。体部外面にはヘラミガキ、体部内面にはハケ、底部は上げ底状である。

vi) 溝 SD03～15 (図7、図版35・44)

18-5～7区において南西～北東、南東～北西方向の溝を多条検出している。これらの溝の底部には土壌中の鉄分の酸化沈殿の痕跡が著しくみられることから、使用時に水流を伴う灌漑に関する遺構である可能性が考えられる。また、埋没後に再び重複する位置で再掘削が行われているものがあることから、溝の機能が継承されていると考えられる。この方位の溝は1999～2001年の調査²³⁾においても確認されていることから、周辺地域において多条並走していると考えられる。出土遺物からこれらの溝の存続期間を限定することは困難であるが、方位が現存条里地割に対応しないことから弥生もしくは古墳時代の溝と考えられる。

現在、4区と5区の土地を分断している灌漑用水路は、過去に灌漑機能を有していた多条の溝をある時期に集約した結果のものかもしれない。5区以西に付けられている字名「溝添」との関連が想定される。

vii) 方形周溝墓 SL01～05 (図7・11、図版36・37・44)

18-8～10区において方形周溝墓の一部を検出している。周溝はいずれも取束し隅部で途切れる。SL01と03は周溝の一部を共有すると考えられる。また、SL02の周溝は幅狭の小規模なものであるが、SL01の周溝の一部を取り込み区画形成を図っていると考えられる。

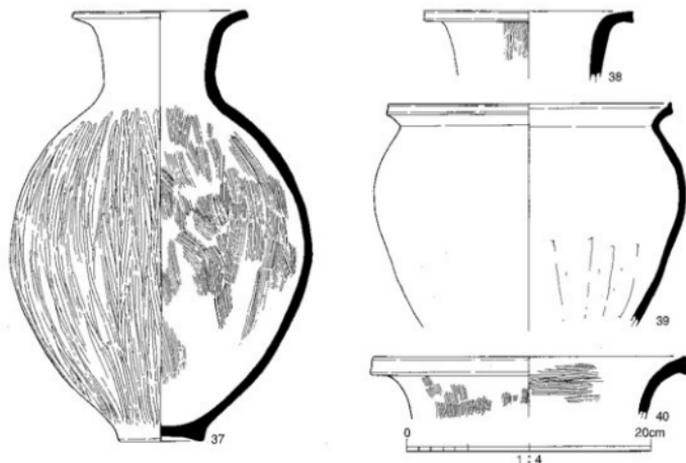


図11 18-7区 自然凹地 SX02 (37)、18-9区 方形周溝墓 SL03 (38・39)、
18-10区 方形周溝墓 SL05 (40) 出土遺物

SL03の周溝から広口壺38、甕39、SL05の周溝から広口壺40が出土している。

38は外傾する頸部から短く外反する口縁部で、端面はわずかに凹面を呈する。39は口縁端部を上方に摘み上げ、端面はわずかに凹面を呈する。

40は頸部から外反する口縁部で、端面のナデにより端部が上下に伸びる。

6 調査成果のまとめ

今回の調査地はこれまでの調査から遺跡の周縁地域にあたるものと考えられたが、住居跡や周溝墓が検出されることにより、弥生時代の集落のさらなる広がりが把握された。また、矢野遺跡では不明瞭な弥生時代前期の集落の存在も想定される。

16-1～3区では弥生時代中期の堅穴住居跡 SA02と方形周溝墓 SL01・02が近接して検出している。矢野遺跡における弥生集落の住居空間と墓域空間の関係については明確ではなかったが、数棟の住居跡と方形周溝墓群で構成される小集団が散在すると考えられる。これは站喰川右岸に位置する名東遺跡における弥生時代中期の集落と同相であり集落構造を考える上で興味深い。

18-1～5区では遺構が希薄な状況であるが、弥生時代前期～平安時代に至る遺構・遺物を確認し、多時期の遺構が重複する地域であることがわかる。特に、自然凹地 SX01から出土している弥生時代前期末～中期初頭の土器の出土は、隣接地での集落の存在が想定され、矢野遺跡における弥生集落の動向を考える資料の可能性を示している。

8～10区において方形周溝墓を推定5基検出している。矢野遺跡における方形周溝墓の墓域については、すでにいくつかの地点³⁴⁾で確認されているが、今回は新たな墓域の発見である。16-1～3区における住居跡と方形周溝墓の配置関係から、弥生時代中期においては数基の墓と数棟の住居のセット関係が一つの小集団を形成するものと考えられ、8～10区で検出した方形周溝墓の周辺には住居跡の存在が想定される。周溝墓は取束する溝で四隅が途切れる形態であり、名東遺跡や蔵本遺跡において確認されている周溝墓と同形態であり、旧站喰川水系の遺跡群で普遍化する。今回発見された方形周溝墓は、周溝の一部を共有する変則的な形態であるが、16-1区の調査や名東遺跡³⁵⁾においてもみられる。ただ、四本の取束する溝で形態を整えるタイプの墓との相違がいかなる要因によって生じているかは明らかではない。方形周溝墓群が形成される領域を明確にした上での細部の検討が必要である。

(註)

- (1) 岩崎直也「四国系土器群の搬出」『大坂文化誌』17、1984年
- (2) 菅原康夫「吉野川流域における弥生時代終末期の様相」『考古学と地域文化』1987年
- (3) 徳島県埋蔵文化財センター「徳島県埋蔵文化財センター年報」Vol.5 1994年
- (4) 徳島県埋蔵文化財センター「徳島県埋蔵文化財センター年報」Vol.6 1995年
- (5) 徳島県埋蔵文化財センター「徳島県埋蔵文化財センター年報」Vol.7 1996年
- (6) 徳島県埋蔵文化財センター「徳島県埋蔵文化財センター年報」Vol.8 1997年
- (7) 徳島市教育委員会「阿波国府跡発掘調査報告書」1999年

- (8) 徳島市教育委員会「阿波国府跡発掘調査報告書」2000年
- (9) 徳島市教育委員会「阿波国府跡発掘調査報告書」2001年
- 04 徳島市教育委員会「徳島市埋蔵文化財発掘調査概要」8、1998年
- 01 徳島市教育委員会「徳島市埋蔵文化財発掘調査概要」10、2000年
- 02 前掲註7)～(9)
- 03 前掲註7)
- 04 徳島市教育委員会「徳島市埋蔵文化財発掘調査概要」18、2008年

II 名東遺跡

1 遺跡の立地と歴史的環境

名東遺跡は鈴川水系の旧河川が形成した標高 T.P.+8 m 前後を測る沖積微高地上に位置する縄文時代晩期～中世に至る集落遺跡である。これまでの名東遺跡における調査では、遺跡の評価に対して面期となる二つの事例がある。一つは、1987年の扁平鈕式六区面装裱文銅鐸の出土¹⁾であり、名東遺跡の弥生集落が吉野川下流域における銅鐸保有集団としての評価を高めた。もう一つは、1992年の朱の精製を示す遺物・遺構の発見²⁾であり、阿波の特産である水銀朱の精製に名東遺跡の弥生集落が強い関わりを持つことが明確化された。

しかし、このような経緯を経るものの、現在においても名東遺跡の弥生集落の形態については不明点が多い。これまでの調査から復原される集落像は、集落構成の主体を成す住居跡は数棟の小集団で構成され、その中に規模的に他を優越する住居跡がみられる。また、住居空間の周辺には方形周溝墓を主体とした墓域が形成され、周溝墓群の中にもやはり規模的に卓越したものがみられる。このような小集団内での格差が社会的なものなのか血縁的なものなのかは不明であるが、小集団の集合体として名東遺跡の弥生集落の存在が想定される。

また、集落構成の問題と同じく、集落の存続期間に関しても依然として問題は残る。名東遺跡では弥生時代中期初頭の遺物が散見されるが、集落の核となる生活遺構の住居跡は中期末と後期末の2時期に大別される。中期末における集落の一時的な終焉は、銅鐸埋納行為に象徴されているかのようにもみられるが、その後、後期末に再び集落が出現するまでの間、集落の動向が不明である。

このような集落経営の一時的な断続は、言うまでもなく土器型式の非連続から生ずるものであり、現在、名東遺跡における弥生時代中期末～後期末の間の明解な土器型式が提示されていない。ただ、これまでの周溝墓の調査において、周溝内における層位的出土資料には、土器型式の非連続性の問題が単に資料の欠如ではなく、型式変遷に齟齬をきたしている可能性を含む事例もみられる。

一方、名東遺跡の中世集落の実像は、弥生の集落像以上に断片的でありその実態は不明である。

2 調査に至る経緯と経過 (図1・2)

今回の調査は、1988年の調査地³⁾の北側に隣接する。1988年の調査では、弥生時代中期の7基の方形周溝墓や中世集落の遺構と遺物を確認している。とりわけ、方形周溝墓群としての確認は1987年の調査⁴⁾に続く検出例であり、当時、名東遺跡の外縁地域において墓域の展開が予測された。今回の調査地においても、当初から周溝墓を主体とする弥生時代の墓域や中世集落の広がりが想定された。

調査は共同住宅建設工事に伴う事前の調査であるが、建物基礎に鋼管杭を使用する設計が提示されたため、杭打設箇所において試掘調査を先行し遺構の現存状況を把握した。その結果、杭打設箇所において遺構が確認されたので、建物建設箇所を対象に調査区(1・2区)を設定した。調査では、試掘調査時に確認した遺構の形態や規模について、いくつかの新しい知見を得て調査を終了している。



図1 調査地位置図

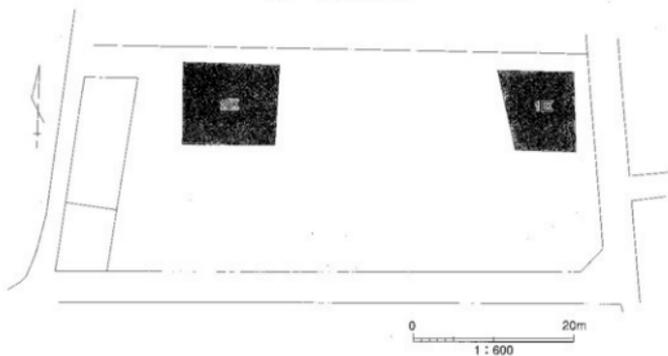


図2 調査地概略図

3 基本層序 (図3・5)

調査地の標高は T.P.+6.7m を測る。現代水田耕作土層下に第1～4層が堆積する。以下、上位より概略する。

第0層：現代水田耕作土

第1層：層厚15cmを測る淡黄色砂質シルトの旧耕作土である。

1-a層：層厚15cmを測る灰白色砂質シルトの旧耕作土である。

第2層：層厚10～20cmを測る黒色砂質シルトで、弥生時代後期の包含層である。

第3層：層厚15～30cmを測る黄褐色～にぶい黄色砂質シルトで、弥生時代中期の包含層である。

第4層：黄色砂質シルトで遺構検出ベース層である。

4層検出面の標高が1区東端で T.P.+6.4m、2区西端で T.P.+6.2m を測り、東から西へ20cmの傾斜がみられることから、4層が低下する2区では3層の堆積が良好に残る。2層は2区においても一部削平されており、1区では削平により2・3層は残存しない。また、南接する1998年の調査地でみられた2層の上位層が確認されていないことから、調査地周辺では後世の水田経営に伴う広範囲な土地の削平が想定される。

4 1区の調査成果

(1) 方形周溝墓 SL28～30 (名東28～30号墓) (図3・4、図版45・47)

いずれも周溝墓の一面を検出している。周溝墓は四隅で周溝底部が立ち上がる収束する溝により区画される。SL28の周溝は幅1～1.2m、深さ20～50cmを測る収束形態であるが、完全に途切れるものではなく、浅い溝で連続し周溝は全周すると考えられる。周溝埋土は上層の黒色シルトと下層のにぶい黄色シルトに大別される。また、周溝底部には厚さ15cmの4層に類似する浅黄色シルトの堆積がみられることから、溝の底部に整地を施し形状を整えた可能性が考えられる。

SL29は周溝の一部をSL28と共有する周溝墓である。SL28と同様に収束する溝で区画するが、浅い溝でSL28の周溝に連続させる。近くに焼成痕のある土壌がみられる。

SL30は周溝幅3.5m、深さ1.2mを測り、これまで名東遺跡で確認されている方形周溝墓の中で最大規模である名東23号墓(区画長辺12m×短辺7m、溝幅2.5～3m、深さ1～1.2m)に匹敵するものである。周溝埋土は上層の黒色シルトと下層のにぶい黄色シルトに大別される。周溝底部には厚さ10cmの砂礫が敷かれ土器片が散乱している。その上位には厚さ20cmの4層に類似する浅黄色シルトの堆積がみられる。SL28と同様に周溝底部での整地痕跡と考えられる。

出土遺物には周溝上層から甕1、高坏2、下層から高坏3が出土している。

1は口縁部をくの字状に屈曲させ、断面形は方形で端面はわずかに凹面を呈する。体外外面は横位タタキ後に縦位ハケ、体内内面には横位ヘラケズリが施される。2は体外外面に縦位ヘラミガキ、脚裾部は大きく開き、脚部と坏部の接合は脚部からの差し込みである。3は脚端部がナデにより摘まみ上げられ、端面は凹面を呈する。脚部外面は縦位ヘラミガキ、内面は横位ヘラケズリを施し、脚部と坏部の接合は円盤充填である。

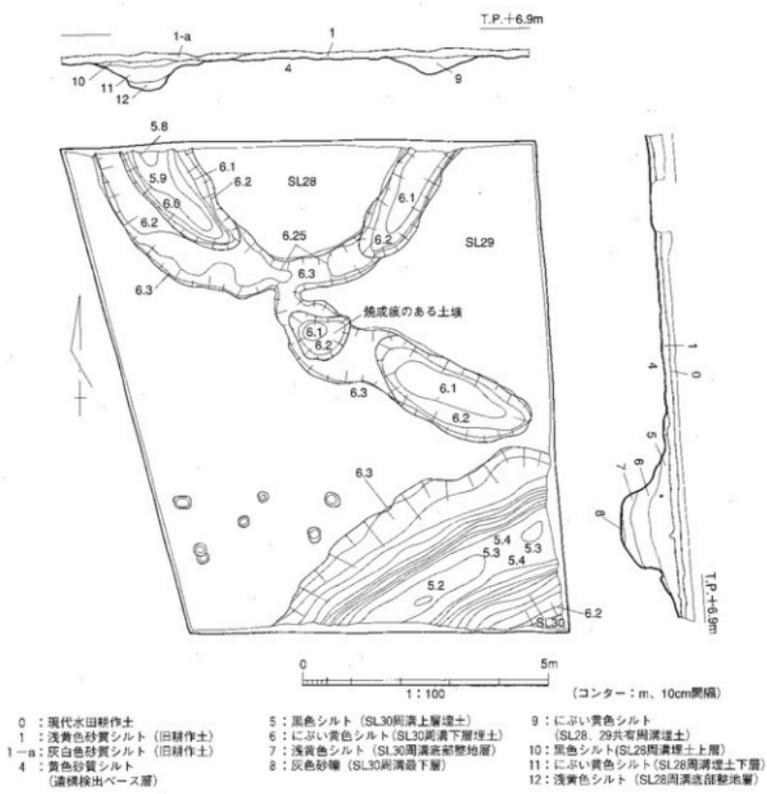


図3 1区 遺構配置図、北・東壁断面土層図

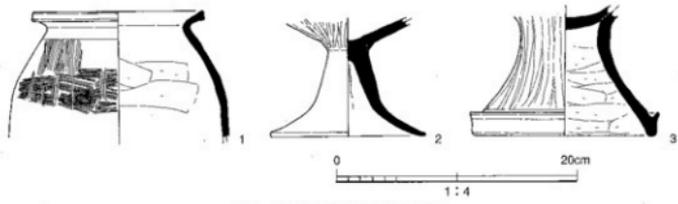


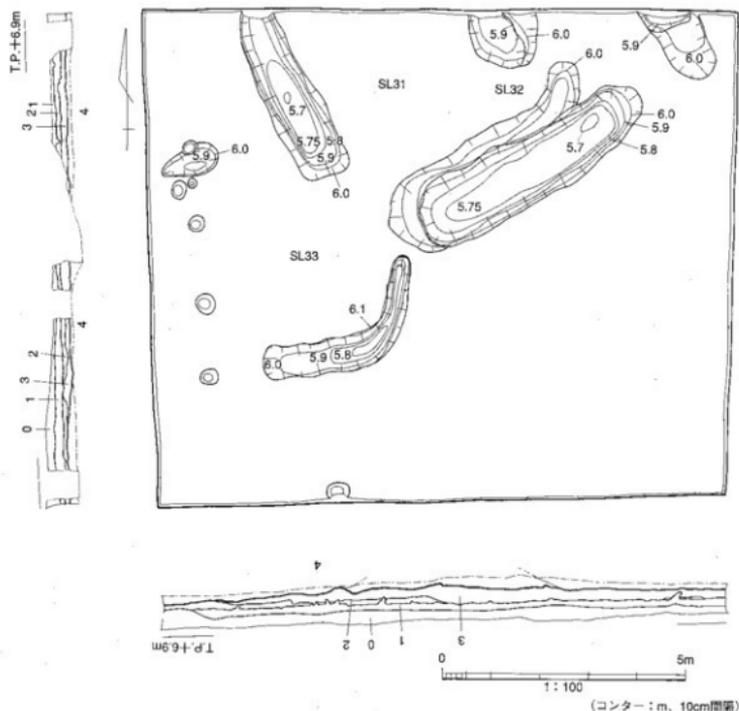
図4 方形溝墓 SL30出土遺物

5 2区の調査成果

(1) 方形周溝墓 SL31～33 (名東31～33号墓) (図4、図版46)

周溝墓 SL31・32は周溝の底部が立ち上がり、検出状況において四隅が途切れる形態を呈するものであるが、周溝が完全に途切れるものであるか否かは不明である。周溝の幅は1～1.4m、深さ40～50cmを測り、SL32はSL31の南側周溝をほぼ同位置で掘削し直し、区画面積を増大させることにより大型化させている可能性がある。周溝埋土は上層の黒色シルトと下層のぶい黄色シルトに大別される。

SL33は定型的な平面形態ではないが、L字状に屈曲する幅70cm、深さ20～30cmの収束する小溝と小楕円形の土塚、さらにSL31・32の収束する2本の周溝の先端部を共有することで区画意識を有していると考えられる。



0 : 現代水田耕作土
1 : 浅黄色砂質シルト (旧耕作土)
2 : 黒色砂質シルト (弥生時代・後期包含層)

3 : 黄褐色～にぶい黄色砂質シルト (弥生時代・中期包含層)
4 : 黄色砂質シルト (遺構検出ベース層)

図5 2区 遺構配置図、南・西壁断面土層図

6 調査成果のまとめ

調査では方形周溝墓6基が確認され、南接する1988年(昭和63)の調査^①で確認した弥生時代の墓域の広がり当地に及んでいることがわかる。周溝墓 SL30(名東30号墓)は名東23号墓^②に匹敵する規模を呈し、この地域で確認されている周溝墓群の中核的な存在と考えられ、名東遺跡の弥生時代中期の集落における住居跡数棟で構成される小集団内には、名東23号墓や30号墓のような突出した規模の墓の造営が考えられる。また、周溝墓 SL28・29のように、周溝を共有させるものがある。名東遺跡では周溝を共有させる形態は初見であるが、鮎喰川左岸の矢野遺跡^③においても確認されている。ただ、周溝を共有することと単独で周溝を有することに、いかなる意味があるのかは不明である。一方、周溝の底部に地山に類似した土を敷く行為は通例的である。周溝墓 SL30ではその下に、さらに砂礫を敷きつめていることから、周溝内での何らかの祭祀行為の痕跡と想定される。

名東遺跡における周溝墓の周溝埋土は、通常、上層の黒色シルトと下層の黄色系シルトに大別される。これまでの調査から上下層の年代観については、上層が弥生時代後期後半、下層が弥生時代中期末とされ、下層→上層にいたる土器型式の連続にはタイムラグが生じている。このタイムラグは、名東遺跡における弥生集落の存続時期と一致し、中期末の集落一時的な断絶と後期後半での集落経営の再開という姿で理解される。これは集落の一構成を成す墓においても、周溝墓における断続的な埋葬行為という同じ現象として捉えられる。

今回、出土遺物の中で年代観に関して明示し得る資料は数少ないが、SL30の周溝の上下層から出土している高坏の坏と脚部の接合手法の相違や型式差は明解である。また、上層出土の甕1は対比資料ではないが、口縁部端面や端部形状に、型式の間隙を埋める要素を求められるかもしれない。この視点に立てば、名東集落の完全な断絶と言うよりも、部分的な集落の撤退という形で存続が想定される。1987年(昭和62)、弥生時代中期末の方形周溝墓群の一面で発見された埋納された銅鐸^④は、このことを暗示しているのかもしれない。

このように、名東遺跡における弥生時代集落が中期末～後期前半にかけて、少数的な要素で満たされる小期間の集落であるならば、その動向を把握するためにも住居跡や周溝墓の層位的な出土遺物に対して小差異な要素を抽出していかなければならない。

(註)

- (1) 名東遺跡発掘調査委員会「名東遺跡発掘調査概要」1990年
- (2) 徳島県教育委員会他「名東遺跡一建設省名東町宿舍建設に伴う発掘調査一」1995年
- (3) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』2、1992年
- (4) 前掲註1)
- (5) 前掲註3)
- (6) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』8、1998年
- (7) 徳島市教育委員会『阿波国府跡発掘調査報告書』1999年
- (8) 前掲註1)

IV 観音寺遺跡

1 遺跡の立地と歴史的環境

観音寺遺跡は国府町観音寺に所在する四国霊場八十八箇所16番札所観音寺を中心とする古代～中世の集落・官衙遺跡であり、阿波国府跡所在地としての最有力候補の遺跡でもある。これまでの観音寺周辺における調査から復原される旧地形では、札所観音寺を中心に広がる南北350m、東西200mの微高地とその周辺では旧河道や沼状化した旧地形が低下した状況がみられる。この範囲における調査事例は数少なく、阿波国府跡の所在確認調査の主眼も、観音寺の東方、国府町府中に所在する大御和神社周辺に向けられていた。大御和神社周辺での調査成果に進展がみられない状況において観音寺遺跡が阿波国府に関する官衙遺跡としての評価を初めて得たのは、1987年（昭和62）の調査¹⁹である。掘立柱建物跡や区画溝とともに、8～10世紀代の大量の遺物の中に、京都系緑釉陶器・篠窯産須恵器・石帯・硯・墨書「政所」など官衙的性格の強い遺物がみられることに起因する。

以後、遺跡の評価をさらに高めたのが、1997・1998年（平成9・10）の調査²⁰で、微高地の西側縁辺部の自然流路から発見された己丑年（持統3・689）銘木簡・税調木簡・論語木簡・和歌木簡、さらに2006年（平成18）に発見された勸耕木簡が示す内容から、7世紀の国府成立以前の段階からこの地域における特殊性が唱えられた。ただ、遺構からこの特殊性を支持するものはみられず、国府政庁の所在については現在も確定していない。

近年、観音寺遺跡における調査では、これまでに類をみない規模の建物跡が確認されている^{20a}。建物跡は掘立柱建物跡であり、柱穴掘形の規模や配置などから復原される建物は通常の構造ではなく、一般的な集落の建物跡とは考え難いものである。また、建物跡は複数で構成され、その周囲には区画溝が巡らされることから、個別の機能を有した施設の性格が考えられる。

従来、阿波国府跡の推定範囲については、国府町一帯に広がる現存条里地割に着目し（この条里は北で西に10°振る）、方6町や方8町という広大な都市計画的なものが考えられていたが、このような個別の施設が国府に関する遺構であるならば、おそらく阿波国府の形態は政庁・藏・曹司・館などの諸施設の離散集合形態であり、その方位は阿波国分寺や国分尼寺の伽藍配置と同じく現存条里地割を指向するものと考えられる。

2 調査に至る経緯と経過（図1・2）

今回の調査は、阿波国府跡所在確認調査として、札所観音寺周辺において2002年（平成14）から継続しているもので、2006・2007年（平成17・18）に実施した調査である。

調査地は、1997・1998年（平成9・10）の調査において木簡が出土した自然河道の東隣の微高地にあたり、現在の地割では方50mの区画が形成されている。この区画内での調査は、1996・1997年（平成8・9）に実施した方形に巡る区画道路での水道管理施設工事における立会²¹があり、10～12世紀代の遺物を採取している経緯がある。今回の調査は、この方形区画内における遺構の内容および存続時期を把握するために実施した。

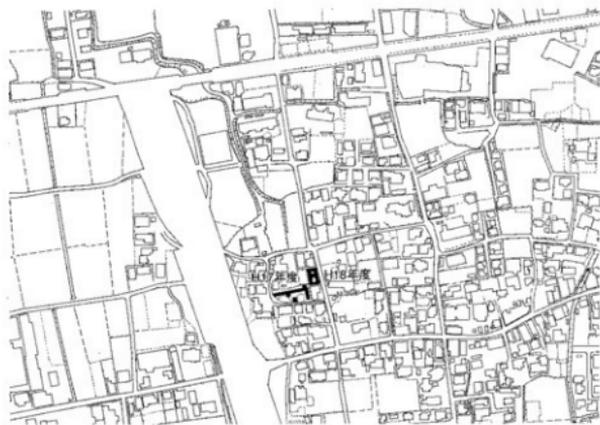


図1 調査地位置図

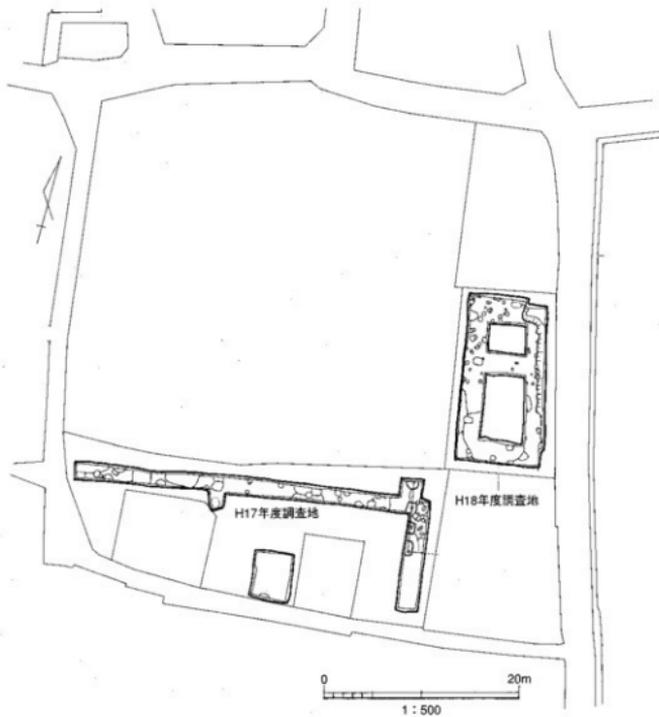


図2 調査地概略図

3 平成17年度の調査成果

調査地の標高は T.P.+7.5m を測る。現在は畑地・墓地であるが、以前は宅地であった。現地表面下70cmの標高 T.P.+6.8mの暗灰色砂礫層上面において遺構を検出している。この遺構検出面より上位には明瞭な層位がみられず広範囲での土地の攪拌が考えられる。

検出した遺構には竪穴住居跡、溝、土塼、掘立柱建物跡がある。なお、今回の調査では、遺構検出にとどめている。

(1) 遺構と遺物 (図3・4、図版48～50)

竪穴住居跡 SA0501は平面形が径8m以上の円形を呈する弥生時代中期の住居跡であり、他1棟の竪穴住居跡と重複している。また SA0502は平面形が一辺3.5mの隅丸方形を呈する竪穴住居跡と考えられる。

検出した遺構の中で、阿波国府跡関連遺構と考えられるものに掘立柱建物跡 (SB0501) と考えられる柱穴列がある。柱穴列は現存条里地割と同方位の N-10°-W の南北方向で3間分で、柱穴掘形は、平面形が一辺1.1mの方形もしくは長辺1.5m (短辺1m以上) の長方形を呈するものがある。柱穴径は30cmを測り、柱間寸法は北から2.8-2.1-2.4mである。柱穴列が南に延びないこと、また東西トレンチには対応する柱穴がみられないことから、北東に展開するものと考えられる。柱穴埋土は暗灰色砂礫混じりシルトであり、柱穴部の明黄色シルトと明確に区別される。

出土遺物には、遺構面上位の堆積層 (攪拌層) より須恵器坏壺1、坏2、高台付坏3、土師器坏4～7・皿8～14、土師器台付皿16、黒色土器碗16、土師器鍋17、緑釉陶器18～20、製塩土器21・22、土師器小皿23、瓦器碗24、軒丸瓦25がある。

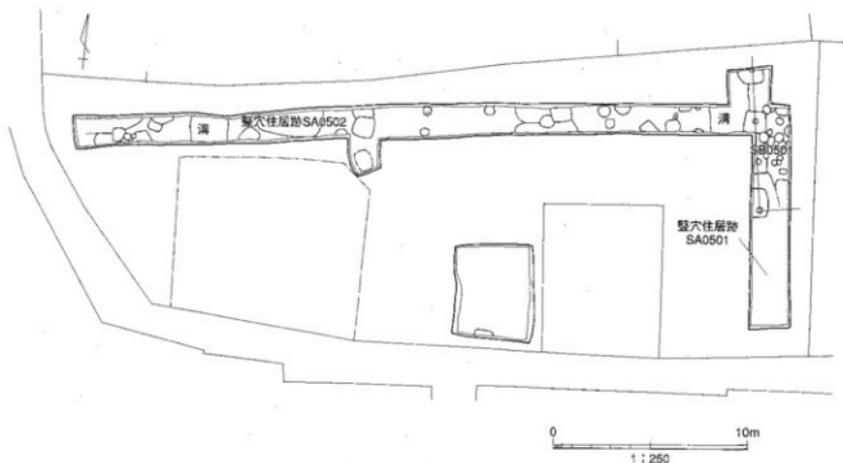


図3 遺構配置図

1は体部を口縁部付近で段をつけ、口縁端部を下方に屈曲し、天井部に扁平な宝珠形の滴まみを付ける。2はかえりの立ち上がりが短く内傾する。3は底部から斜上方に直線的に立ち上がる体部で、口縁端部は外反する。高台は体部直下に貼り付けわずかに外側に踏ん張り、高台成形はシャープさに欠ける。1・3は焼成不良である。

4～7は回転台成形で、4・5には赤色塗彩痕がある。4・6・7は底部から斜上方に立ち上がり口縁部は外反する。5は底部内面からの押し成形により、底部が丸底を呈する。

8～14は粘土紐巻き上げの回転台成形で、8・12は口縁部の器壁が厚く内面はほとんど屈曲しない。10・13は口径に対して底径の占める割合が大きく、口縁部を短く立ち上げる。9～11・13の底部外面には、粘土紐の接合痕が明瞭に残る。14は底部と体部の屈曲が明瞭で口縁部を外反させる。

15は器壁が厚く、底部中央に穿孔が施されている。17はくの字状に外反する口縁部で、体部外面にハケが施される。

18・19は灰白色、20は黄白色の軟質胎土で、全面施釉、削り出しの輪高台で、18は見込みに1状圈線がめぐる。18・19は濃緑色、20は淡緑色を呈する。21は内面に布目瓦痕がある。

23は回転台成形の小皿で、24は口縁部に横方位のナデ、体部内外面にヘラミガキが施される。25

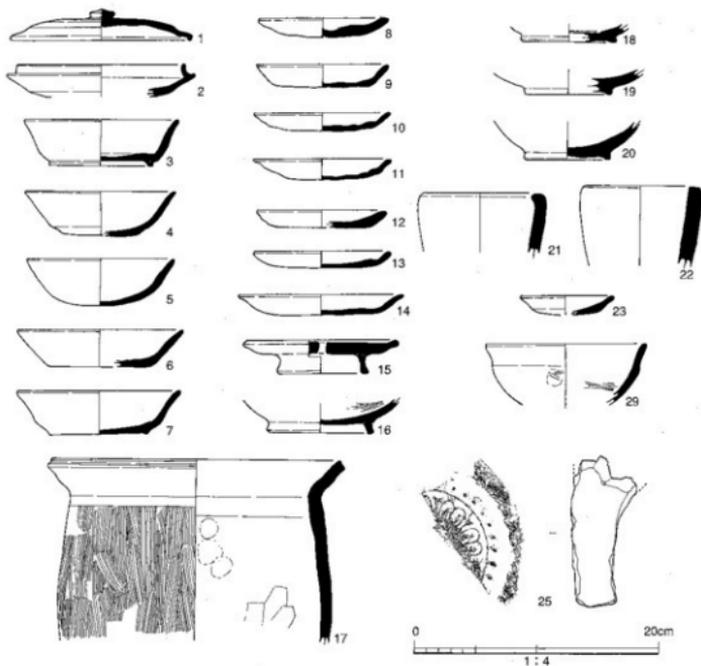


図4 出土遺物

は8葉複弁蓮華文軒丸瓦である。

4 平成18年度の調査成果

調査地の標高は T.P.+7.5m を測る。現在は空地であるが、以前は住居が構えられていた。平成17年度の調査で検出した掘立柱建物跡 (SB0501) と考えられる柱穴列の広がり確認に主眼を置いた。

現地表面下80cmの標高 T.P.+6.7mの暗灰色砂礫層上面において遺構を検出している。平成17年度調査地と同様に遺構検出面より上位には明瞭な層位がみられず土地の攪拌が考えられる。

検出した遺構には竪穴住居跡、溝、土塋、ピットがあり、原則的に遺構検出でとどめているが、一部遺構掘削を行っている。

(1) 遺構と遺物 (図5・6、図版48・51)

竪穴住居跡 SA0601は径6mの不整方形を呈し、須恵器片が出土している。平成17年度調査において検出した掘立柱建物跡 (SB0501) に関連する柱穴については確認されていない。また、同規模の柱穴も確認されず、建物群としての広がりも確認されていない。

溝 SD0601は現存条里地割と同方位の $N-10^{\circ}-W$ の南北方向である。調査地内で溝の落ち込み

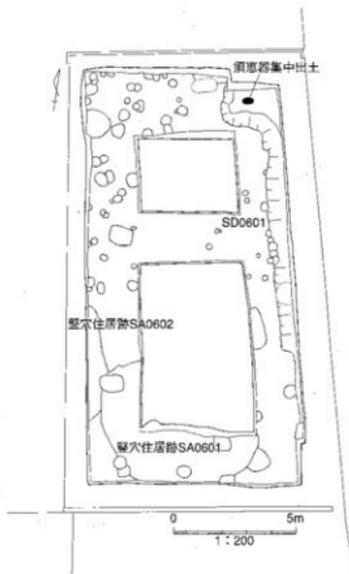


図5 遺構配置図

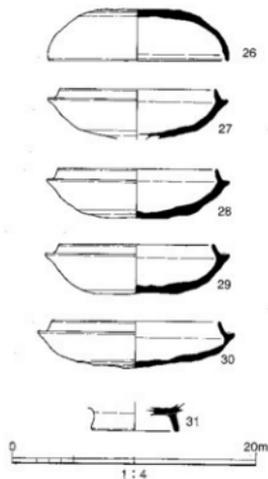


図6 出土遺物

ラインを検出しているが、溝の幅や深さについては不明である。調査地北東隅部でL字状に屈曲した箇所では6世紀後半の須恵器が集中して出土している。ただ、出土遺物には土師器碗・黒色土器B類もみられることから、この箇所では遺構と重複している可能性が考えられる。

出土遺物には、須恵器蓋26、坏27-30、土師器柄31がある。26は器高が低く平坦な天井部で、口縁端部に鈍い段がみられる。27-30の立ち上がりは矮小化し、器高は低く扁平である。受部は水平もしくはやや上向きに外方にのび、体部外面のヘラケズリの範囲は全体の1/2-1/3以下である。

5 調査成果のまとめ

今回の調査は観音寺における方50m道路区画内での遺跡内容を把握するためのものであるが、掘立柱建物跡と考えられるSB0501の規模については明確にできなかった。また、調査では他に同規模の建物柱穴跡も確認されていないことから、この地域における建物群としての存在については疑問を残した。溝SD0601は区画溝としての性格も考えられるが、年代観に関しても明確ではない。

ただ、出土遺物においてこの地域での古代以降の年代観が6-13世紀代と非常に長い時間幅があること、また、その中に緑釉陶器、黒色土器、製塩土器など特殊な遺物がみられることから、一時的には官衛的な施設を基盤とした遺跡であったことが想定される。

今回の調査地から東へ50mの地点での調査(平成14・15年度)では、N-10°-W方位の8世紀代の掘立柱建物跡群とそれらを区画する溝により構成される空間が確認されている(図7)。これらの建物群とSB0601の柱穴掘形との比較において、柱穴掘形の平面形や柱穴部埋土の類似、掘形に切り合い関係がみられないことや柱間寸法がばらつき等間隔ではない点に共通性がみられる。建物群の広がりとしても理解できるが、緑釉陶器などの特殊性のある遺物が示す年代観のズレを考慮

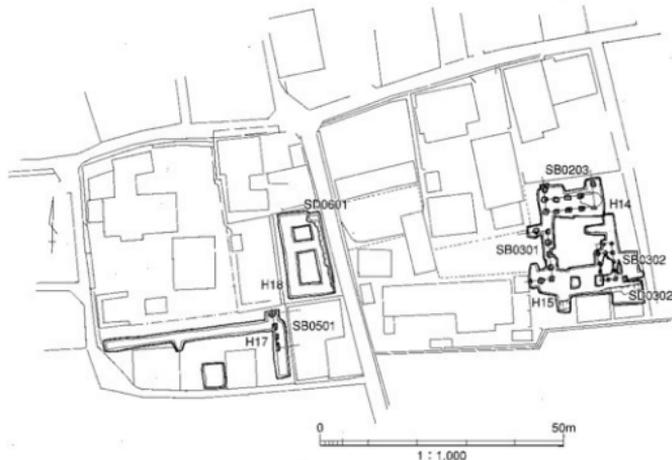


図7 観音寺遺跡における掘立柱建物跡

する必要もある。今回の調査地は、国府跡に関する情報を含んだ「観音寺木簡」をはじめとする大量の遺物が出土した自然河道の東隣にあたるが、遺構や遺物の様相に突出した要素はみられない。

近年、観音寺遺跡では規模の大きな柱穴掘形をもつ掘立柱建物跡群が確認されている。掘立柱建物群は区画溝により一つの機能をもつ施設として理解される。1987年の調査⁽¹⁾では、掘立柱建物跡を区画する溝から墨書「政所」の出土があり、施設的具体像に関する資料がみられる。阿波国府跡では、政庁を中心に各施設の離散集合形態が想定されることから、今後の調査成果を面的にとりまとめていく必要がある。

(註)

- (1) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第6次調査』1988年
- (2) 徳島県教育委員会他『観音寺遺跡』Ⅰ（観音寺木簡篇）2002年
- (3) 徳島市教育委員会『阿波国府跡発掘調査報告書』2003年
- (4) 徳島市教育委員会『徳島市埴藏文化財発掘調査概要』16、2006年
- (5) 前掲註(1)
- (6) 徳島市教育委員会『徳島市埴藏文化財発掘調査概要』8、1998年
- (7) 前掲註(1)

写 真 图 版



検出遺構 (後方に徳島城跡)

(東から)



検出遺構

(南西から)



検出遺構（第6層任意面）

（北から）



検出遺構（第7層上面）

（北から）



掘立柱建物跡 SB01 (西から)



南壁面 (北西から)



土壇 SK07南壁面 (北から)



土壙 SK05遺物検出状況
(南から)



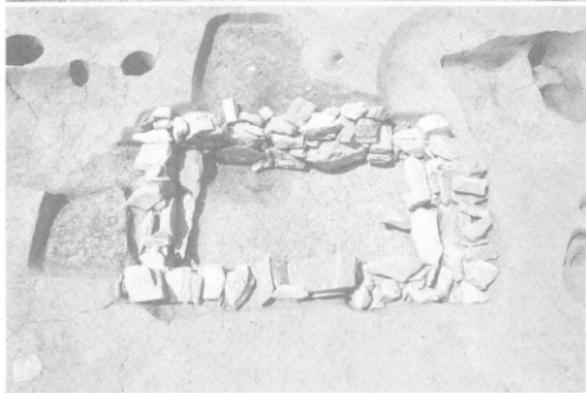
土壙 SK05遺物検出状況
(西から)



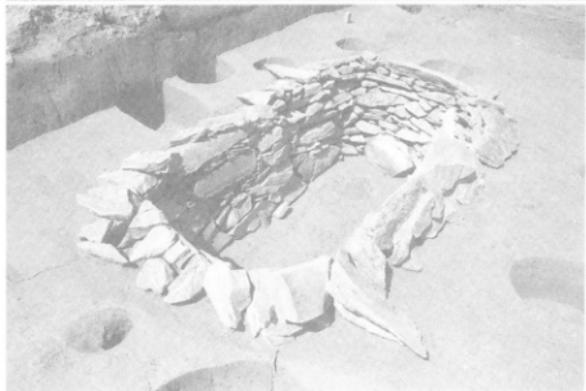
土壙 SK05遺物検出状況
(南東から)



石室 SN01 (南から)



石室 SN02 (東から)



石室 SN03 (南東から)